11
2026

教育時報

Educational Bulletin

特集 | 架け橋期の教育の充実



いっぱい、色ができちゃった（真庭市立久世こども園）

岡山県教育委員会

みんなで学んでかがやく未来

「おかやま教育の日」（11月1日）標語

教育時報 2026年11月号
通巻922号

1 ■標点
地域とともにある学校の姿 ～中学校のコミュニティ・スクールの活性化をめざして～
津山市教育委員会　教育長　北山 浩二

特集
架け橋期の教育の充実

2 【巻頭論文】架け橋プログラムの実施　保育の質向上及び授業改善に向けて
鳴門教育大学　名誉教授　木下 光二

6 【説明】架け橋期の充実による幼保小の円滑な接続について ～架け橋期意識した実践より～
県教育庁義務教育課／県幼児教育センター

10 【事例紹介①】未来へ続け学びのバトン ～幼児教育の質向上から小学校教育の質向上へ～
美作市教育委員会学校教育課

12 【事例紹介②】架け橋期の充実に向けた取組 ～子どもをまんなかにつながる園小職員組織の構築～
和気町教育委員会

14 【事例紹介③】ワーキンググループを活用した架け橋期のカリキュラム作成に向けた取組
津山市教育委員会学校教育課／津山市こども保健部こども保育課

16 ■子どもの声・保護者の声・地域の声
テーマ：「幼保小の接続の充実」

17 ■写真コーナー
写真だより

21 ■随想　岡山市立旭竜小学校　森井 歩美／真庭市立落合中学校　井上 将人／県立東備支援学校　馬場 直樹

23 ■教育新着図書紹介　県立図書館

24 ■中高生なんでもトーク292
瀬戸内市立長船中学校　青木 麗々愛／県立高梁城南高等学校　小原 大輝／県立岡山朝日高等学校　化学部

26 ■私の工夫
避難訓練の実効性を高める！ ～「他人事」から「自分事」へ～
倉敷市立船穂小学校　中原 洋子
先生方が学び続けられる学校へ ー対話が循環する仕組みづくりー
津山市立中道中学校　西川 裕美
学科の枠を超えて「つなぐ・つながる」STEAM教育の取組
県教育庁高校教育課　山本 茂樹

32 ■県教委だより
◆創作の広場　県立玉島高等学校／倉敷市立茶屋町小学校

標点

地域とともにある学校の姿
～中学校のコミュニティ・スクールの活性化をめざして～

津山市教育委員会　教育長　北山 浩二

私はこれまで市内中学校の学校運営協議会委員を務める中で、中学校におけるコミュニティ・スクール活動の難しさを感じていました。

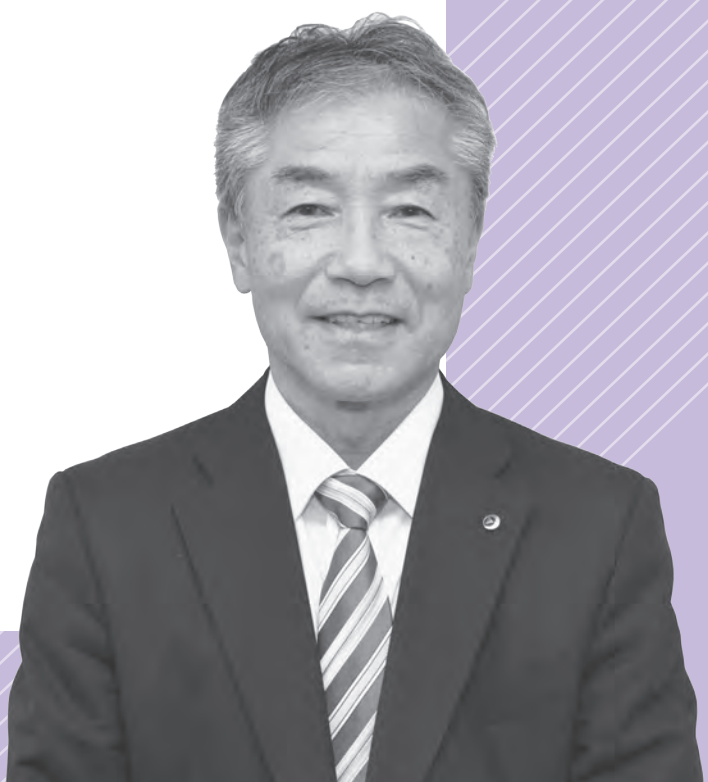
本市には、「津山っ子を守り育てる市民の会」や「青色防犯パトロール」など、地域の方々による青少年の健全育成を目指した自主的な団体が数多くあります。私自身、子どもたちを深く思うこの「地域の力」に幾度となく救われてきました。だからこそ、「こうした地域の力を、中学校のコミュニティ・スクール活動にもっと活かせないか」と、4月の着任以来ずっと思案を重ねていました。

そうした中、ある中学校を訪問した際、校長先生から心に残る話を伺いました。生徒総会を控えた生徒たちが、自分たちの要望を実現させたいと学校運営協議会委員の方々と話し合いを持ち、「根拠を明確に述べること」「マイナス面も誠実に伝えること」など、大人社会の視点からの貴重なアドバイスを活かし、大人顔負けの見事な提案を成し遂げました。教員からの指導ではなく、地域の方々から率直な意見や社会の考え方を教わったことが、子どもたちにとってかけがえのない経験になったと聞き、深く感銘を受けました。

また、同じ日に訪問した別の中学校では、学校運営協議会が主催する「中学生と地域の大人との座談会」が「働くことについて」をテーマに行われ、私も地域の大人として参加しました。私が教員の仕事の喜びや厳しさを率直に語ると、一人の生徒が「将来は教師になりたい！」と夢を語ってくれ、胸が熱くなるような嬉しい時間を過ごすことができました。終了後には参加した大人からも「中学生と話をして、こちらがいろいろと考えさせられた」という声が多く聞かれました。

この日、奇しくも訪問した2校での出来事は、私がずっと悩み続けていた「中学校のコミュニティ・スクールがめざすべき方向」を示す、貴重な道しるべとなりました。

子どもたちが生きていく上で必要な学びは、決して学校や教員だけで担うものではありません。津山の力強い「地域の力」を学校や子どもたちとしっかりとつなぎ、「地域とともにある学校づくり」を今後一層進めていきたいと考えています。



巻頭論文

架け橋プログラムの実施 保育の質向上及び授業改善に向けて



鳴門教育大学
名誉教授
木下（きのした）　光二（みつじ）

鳴門教育大学大学院修士課程修了、教育学修士。徳島県内の公立小学校教諭、鳴門教育大学附属小学校教頭、同附属幼稚園教頭等を経て、2008年に鳴門教育大学准教授、2011年より同教授。2024年より鳴門教育大学名誉教授、特命教授。文部科学省「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」委員、幼稚園教育指導資料作成・改訂委員などを歴任し、全国で保幼小接続や幼小連携の推進・指導助言に従事。主な著書に『遊びと学びをつなぐこれからの保幼小接続カリキュラム』（チャイルド本社、2019年）、『育ちと学びをつなげる幼小連携』（同、2008年）などがある。

1　はじめに

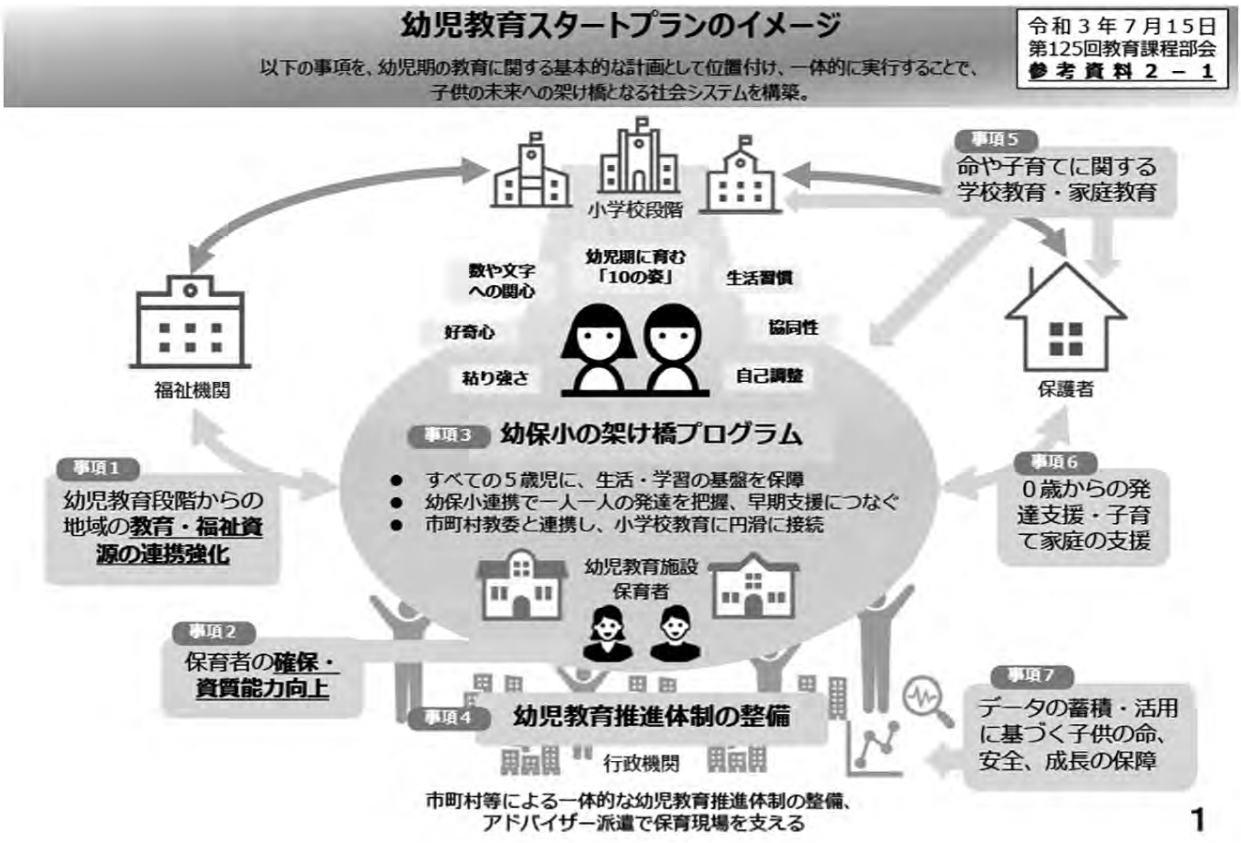
文部科学省の定める学校教育の基本理念は、「社会に開かれた教育課程」であり、それは、幼児期と児童期が繋（つな）がることも意味しています。

同幼児教育課は、平成17年に連携を進めるための幼稚園教育指導資料「幼児期から児童期への教育」を作成しました。続いて平成22年には接続推進に向けて、「幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続を図るための調査研究協力者会議」を実施し、教育課程の連続性を打ち出しました。私はいずれの会議も委員を務めましたが、人が繋がる〝連携〟と、教育課程を繋げる〝接続〟の重要性が明示されました。連携と接続は車の両輪と考えてよいでしょう。

更に同省は令和4年に〝架け橋プログラム〟を策定しました。これまでの連携や接続を踏襲しつつ、5歳児と1年生の2年間を繋げるカリキュラムの作成や、地域のネットワーク化を図ることなどが主な内容です。中教審架け橋特別委員会で審議された課題と目指す方向性には、次のように記されています（著者抜粋）。

〈課題〉
（1）幼児教育の質に関する社会や小学校等との認識の共有
（2）0～18歳まで見通した学びの連続性に配慮しつつ、幼保小の接続期の教育の質を確保するための手立ての不足

〈目指す方向性〉
（1）「社会に開かれたカリキュラム」の実現に向けた質に関する認識の共有
（2）「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と各園・学校や地域の創意
（4）幼児教育推進体制等の全国展開による、教育の質の保障と専門性の向上



幼児教育スタートプランのイメージ
文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会（第 125 回）参考資料 2-1

2 連携・接続から架け橋へ

私が勤めていた鳴門教育大学附属小学校と附属幼稚園では、長年にわたって連携や接続に取り組んできました。春には５歳児と１年生が一緒に学校探検オリエンテーリングを行い、見つけた宝物でカルタを作って遊びます。その際、五七五の俳句を創る国語的な活動や、中庭の花や池の鯉など数える算数的な活動も実施します。夏にはペットボトルの筏を一緒に作って遊びます。集めたペットボトルが４０００個を超えることもあり、懸命に数える姿も見られます。秋には一緒に育てたサツマイモを大中小の３つに分けて数えたり、冬には学校探検双六（すごろく）を作って遊んだりする活動を実施します。いずれも小学校１年生の既存のカリキュラムを生かし、両者が楽しく夢中になれるように計画・実施します。

このような活動を指導計画に位置付けると接続カリキュラムとなり得ます。更に、５歳児と１年生の２年間のカリキュラムに発展させることで架け橋プログラムにも繋がります。

その際、カリキュラムの作成を目的にするのではなく、作成する過程でお互いの教育を知り、学び合うことが大切です。両者が交わるプロセスで生まれる保育・教育の質向上こそが、架け橋プログラムが本来求めていることと言えるでしょう。



幼小連携カリキュラムモデル

3　遊びと学びの可視化

架け橋特別委員会の参考資料には、そのねらいが次のように書かれています。

> 「幼児期から児童期の発達を見通しつつ、5歳児のカリキュラムと小学校1年生のカリキュラムを一体的に捉え、地域の幼児教育と小学校教育の関係者が連携して、カリキュラム・教育方法の充実・改善にあたることを推進する。架け橋期に園の先生が行っている環境の構成や子供への関わり方に関する工夫を見える化し、家庭や地域にも普及する他」
>
> （一部抜粋、・点は筆者加筆）

見えない学びは繋がりません。架け橋プログラムをよりよいものとするには、保育や授業に見られる育ちや学びを具体的に可視化し、共有することが大切です。

（1）幼児期のエピソード

幼児期4月のエピソードです。ある年の春、5歳児の花壇に少し傾いた立て札が立っていました。興味を覚えて覗いてみると、文字が書かれていました。「わたげ…」までは読めたのですが、次に書かれている文字はわかりませんでした。書いた幼児に尋ねると、「わたげをうえています。」と教えてくれました。写真でもわかるように「お」「え」「て」は字形が違っていて、「ま」は鏡文字になっています。春になり、どこからか飛んできた綿毛を拾い、たんぽぽの種であることを知っている幼児は、花壇に植えました（自然との関わり・生命尊重）。そして綿毛が踏まれず、無事に育つように願いを込めて立て札を作りました（自立心、社会生活との関わり、道徳性・規範意識の芽生え）。木材をT字型に組み2本の釘を打ち付け、そ



5歳児作成の立て札



幼児期の終わりまでに育って欲しい姿のイメージ

こに自分の気持ちを文字にして表現しました（思考力の芽生え、文字等への関心・感覚、言葉による伝え合い）。何気ないエピソードですが、植物や自然に寄せる優しい思いや畏敬の念、文字への興味関心、自発性や創作意欲などは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に当てはまります。遊びに見られる学びや姿を可視化・共有し、児童期の理解を促すことが大切になります。

（2）児童期のエピソード

入学間もない４月のエピソードです。生活科の学校探検で、花壇に敷き詰めてある白い石を宝物に選んだ児童がいました。みんなで見に行くと、花壇の縁に貼られている小さなタイルの上に白い石を並べ始め、タイルと石が１対１対応になっていました。並べながら、「１１５になったよ」「２００まで並べちゃった」のような会話が聞こえてきます。この時期、５までの数が算数の指導内容ですが、並べて遊んでいると5や10で留まることはありませんでした。中には白い石を10個ずつのかたまりにしている児童もいました。10個ずつのかたまりにする内容は６月の指導内容であり、１００までの数は3学期の指導内容です。児童期において数えて遊ぶ、数えることを楽しむ学習は、幼児期を踏まえた学習、学びの芽生えから自覚的な学びに繋がる学習と呼べるでしょう。10の姿で捉えるなら自立心、協同性、数量への関心・感覚、思考力の芽生え、豊かな感性・表現等に当てはまります。


石を並べて遊ぶ１年生

もちろん、これらのエピソードを1枚のカリキュラム（年間指導計画）に入れるスペースはありませんが、月や週ごとの指導計画なら可能です。遊びと学びの可視化（記録）を作成時のバックボーンとするだけでなく、実践・評価・改善の際にも生かすことが大切です。それぞれの保育や授業の質向上が問われているように思います。

4 おわりに

カリキュラムは教育課程や指導計画の総称であり、ねらいや内容、順序や手立てなどを表します。カリキュラムマネジメントやＰＤＣＡサイクルでは計画に位置付き、実践・評価・改善を経て、再び計画へと循環することが求められます。前述したようにカリキュラムの作成（計画）が本来の目的ではないことを考えると、実践から生まれる学びの可視化を評価・改善し、そして再び計画へという流れが重要になります。実践に見られる子どもの学びを可視化し、見てわかる、読んで楽しいそれぞれのオリジナルな架け橋カリキュラム（プログラム）が作成されることを期待しています。

従来、幼児教育と小学校教育は同じ教育という土俵にもかかわらず、遊びと学習という隔たりがあったことは否定できません。しかし、異質なものが出会うからこそ異なるものが見え、新しいものが生まれます。幼児期のどこまでも子どもに寄り添う特性、児童期の客観的に学びを積み上げていく特性、それぞれに良さがあります。それぞれの良さを合わせた教育を創れば、お互いに今以上に豊かな保育・教育（世界）を創り出すことが可能になります。連携・接続・架け橋は待っていても始まりません。子どもの幸せ、保育の質向上と授業改善に向けて、勇気ある一歩を踏み出していただけたらと思います。

説　　明

架け橋期の充実による幼保小の円滑な接続について
～架け橋期を意識した実践より～

■ 県教育庁義務教育課
県幼児教育センター

現在は、文部科学省の「幼児教育推進体制等を活用した幼保小の架け橋プログラム促進事業」（令和６年度）の指定を受け、県内全域における幼保小接続の取組の更なる推進に努めています。

1　はじめに

県教育委員会（以下「県教委」という。）では、幼児教育の充実に向けて、平成27年度に「就学前教育推進プロジェクト」を立ち上げ、「就学前教育スーパーバイザー（現在は「架け橋期のコーディネーター」）」を配置して研修体制を整えるとともに、「保幼小接続スタンダード」（資料１・２）を発行し、幼児教育と小学校教育の接続に向けた指針を示してきました。

2　「架け橋期」の背景

本県では、平成30年度に県内各小学校（義務教育学校を含む）における、生活科をはじめとする教科学習と幼児期の遊びの要素を組み合わせた「スタートカリキュラム」を作成しました。また、県内各園においても、５歳児（年長児）後半の子どもが小学校生活や学習にスムーズに適応できるよう、遊びを通した学びを小学校につなぐ「アプローチカリキュラム」を作成し、相互の円滑な接続を図ってきました。

しかし、幼保小での交流活動や各カリキュラムの実施などの取組が進みつつあるものの、形式的な連携にとどまるという課題が全国的に見られました。



資料１　保幼小接続スタンダード（2016）



資料２　保幼小接続スタンダード【増補版】（2024）

こうした中、令和５年度に文部科学省において『幼保小の「架け橋プログラム」の実施に向けての手引き（初版）』が作成されました。

手引きでは、従来の接続期を拡充し、「義務教育開始前後の５歳児から小学校１年生の２年間」は、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくるための重要な時期であるとし、この時期を「架け橋期」（図１）と定義しました。



図１　架け橋期のイメージ

こうした国の考え方を踏まえ、本県では、幼保小の教職員が共通の視点を持ちながら、相互の教育内容や教育方法のつながりを明確に表す「架け橋期のカリキュラム」の作成と実践的活用の重要性を継続して発信しているところです。

3　架け橋期の充実に向けた取組

さらなる架け橋期の充実を目指し、現在、県教委では、次のような取組を行っています。

(1) 研修

一つ目は、「幼保小架け橋プログラム推進会議」です。

本会議では、市町村教育委員会等（以下「市町村教委等」という。）の幼保小接続担当者や指導主事等が一堂に会し、各地域におけるカリキュラム作成の現状や課題について情報交換を行うことで、新たな「架け橋期のカリキュラム」の作成・ブラッシュアップに向けた協議を行っています。

二つ目は、立場や経験に応じた「キャリアステージ別研修」の推進です。

市町村教委等から推薦を受けた教職員を対象に、研究成果や実践事例の発表を行う「幼児教育研究協議会」、校園長や主任等を対象とする「幼保小接続研修会」等を実施しています。参加者一人一人が「架け橋期の充実」に向け、それぞれの立場に応じた専門性を高め、幼保小における指導体制の構築を図っています。

(2) webサイト

多忙な現場の教職員がいつでも短時間で学べるよう、研修動画やワークシートなどを掲載したウェブサイト（資料3・4）を作成・運用しています。10分程度で視聴できる研修動画や各種資料など、園内・校内研修から個人での学びまで幅広く活用できるコンテンツを掲載することで、各地域や幼保小における自主的な取組を継続的にサポートしています。



資料3　岡山県幼児教育センターホームページ

(3) コーディネーター訪問事業

「架け橋期のコーディネーター訪問事業」（※旧「就学前教育スーパーバイザー派遣事業」）では、就学前教育の専門家による直接的な支援を積極的に展開しています。



資料4　岡山県幼児教育センター作成　研修動画

具体的には、市町村教委等や幼保小の希望に応じてコーディネーターを派遣し、幼保小の連携によるカリキュラムの作成や改善サイクルを確立できるよう助言を行うことで、幼児期に育まれた力を小学校の連続した学びとしてつなげていくことを目指しています。

令和7年度には、計48回の訪問を行い、1000人を超える参加者に実践的な講義や演習、助言等を行いました。研修参加者からは、「作成に向けての流れが明確になった。」（指導主事）「カリキュラム作成のためには、お互いの学びについて知ることが必要。まずは、園の遊びの様子を、しっかり見取りたい。」（小学校教諭）などの声が寄せられており、訪問支援を通じた、確かな成果がうかがえます。

4　幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

幼児期は、「遊び」の中で周囲のヒト・モノ・コトに自ら進んで関わりながら、豊かで多様な経験

を通して、様々な「学びの芽」を育む時期です。

遊びを通して育まれる「おもしろそう」「やってみよう」という興味・関心や、友達と一緒に遊ぶことで育まれる協調性などは、小学校教育での学習につながる「学びの芽」となります。

また、文部科学省の「幼児期の大切な学びが分かる動画シリーズ」（文部科学省．幼児期の大切な学びが分かる動画シリーズ．文部科学省ホームページ．２０２５．next.go.jp）（資料５）には「遊びは学び　学びは遊び」というフレーズが示されており、幼児期の遊びの中に、小学校教育につながる「学びの芽」がいくつも散りばめられていることが紹介されています。



資料５　幼児期の大切な学びが分かる動画シリーズ
「学びの芽」を育む園の工夫って？（多様な遊び編）

そこで、幼保小の教職員たちに求められるのは、「園児の遊びの姿から、園児が何を学んでいるかを豊かに見取る」ことです。

岡山県幼児教育センター主催の保育参観を伴う研修では、幼保小の教職員たちが幼児期に育む「学びの芽」をつかむことができるよう、実践的な見取りを経験する取組を進めています。

その際、「学びの芽」を見取るための核となるのは、５領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）のねらい及び内容に基づき、５歳児後半に見られる資質・能力を示した「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」です。

本県では、幼保小の教職員による共通理解を図るため、この姿をイラストと言葉で分かりやすく整理しています（資料６）。

研修では、まず、本資料を活用しながら、「学びの芽」を見取るための視点を明確にして参観に臨みます。参観後は、見取ったことを言語化して伝え合い、様々な見取りを共有することで、新たな気づきを得ることになり、参加者一人一人が自分なりの言葉で、「学びの芽」とは何かを具体的に語ることができるようになります（資料７）。

このような研修方法は、市町村教委等が独自に行う研修や幼保小接続の取組にも生かされており、



資料６　岡山県幼児教育センター作成
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

幼児期の「学びの芽」を多角的に見取り、それを小学校での学びにどのようにつなげていくかという視点が、幼保小で共有されるようになってきました。



資料７　協議の様子

5　今後に向けて

「架け橋期のカリキュラム」の作成・改善においては、幼保小の教職員が立場の違いを越え、当事者意識をもって連携・協働していく必要があります。その連携・協働を強力に推進するためにも、行政のリーダーシップが欠かせません。

行政には、立場や設置主体の異なる幼保小の教職員が共通の目的に向かって対話できる「場の設定」を行うとともに、単に方針を示すだけでなく、各地域の現状や課題に応じた具体的なアドバイスや専門家の派遣を行う「伴走支援」に取り組み続けることが求められています。行政の適切なリーダーシップのもと、研修や接続の実践を積み重ね、立場を越えて互いの意識を高めていくことで、架け橋期の充実に向けた取組がより一層進むと考えています。

本県では、令和7年度から3年計画で、幼保小と中学校が連携し、架け橋期のカリキュラム作成や検証・改善サイクルの確立を図るとともに、幼児期に育まれた力を連続した学びとしてつなげていくことを目指し、「夢への原動力構築事業」を実施しています。

２中学校区（笠岡市、美咲町）を研究校区として指定し、就学前教育から義務教育終了までの12年間で身に付けさせたい資質・能力の整理や、学びの連続性についての研究を行っています。それぞれの取組は、「幼保小中接続フォーラム」での公開授業等を通して発信することとしており、今後も幼保小中における教育内容や指導方法の接続について検討を進めていく予定です。

6　おわりに

「架け橋期」における幼保小の接続は、単に小学校の生活に慣れるためのものではありません。子どもたちが幼児期に夢中になって遊び「楽しかった！」「なぜだろう？」という体験は、小学校での「なるほど！もっと知りたい！」という知的好奇心へとつながります。幼児期に育まれた力を小学校教育にスムーズにつなぎ、さらに広げていく意識（図２）を持つことが、今後、架け橋プログラムの推進において極めて重要となります。

「子どもに関わる全ての大人が連携し、対話を重ねてつながりを深めることが子どもたちの安心や充実した学びの基盤になる」という考えのもと、市町村教委等や幼保小、地域が一体となった支援体制づくりを継続して進めていきましょう。現場の先生たちに寄り添う伴走者として、子どもたち一人一人が生き生きと学ぶことができるよう、架け橋期の充実に一層努めてまいります。

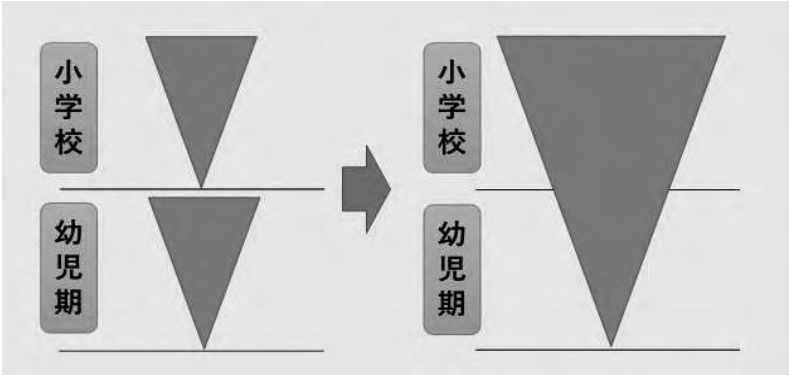


図２　幼児期の育ちと小学校教育の接続イメージ
（保幼小接続スタンダード【増補版】より）

事例紹介①

未来へ続け学びのバトン
～幼児教育の質向上から小学校教育の質向上へ～

美作市教育委員会学校教育課

1　はじめに

本市は、平成28年度から文部科学省の「幼児教育推進体制事業」を受託し、幼児教育アドバイザー（現在は、架け橋期コーディネーター）を配置して、幼児教育の質向上と幼保小接続に力を入れてきました。

本市の特徴は、幼稚園・保育所・認定こども園（以下「園」という。）について、施設類型を問わず教育委員会が管轄していることです。この強みを生かし、０歳から15歳まで、中学校区ごとの特色を生かした連携教育を推進しています。中学校区ごとの校園長会議には、保健福祉部の関係者も集い、子どもについての情報交換・共有だけでなく、学びの連携も進めています。

2　幼児教育の質向上・・・美作市幼児教育目標「きらきら笑顔　夢中になって遊ぶ子ども」を目指す取組

幼児教育は人格形成の基礎を培う重要なものであり、小学校教育に滑らかに接続するためには幼児教育の質向上が必要です。そのためには、教職員研修の充実による専門性の向上は何より大切であると考えています。そこで、独自の研修体制を構築しています。

（1）美作市のホープを育てる初任者研修「鉄は熱いうちに打て」

本市が特に大切にしているのが「初任者研修」です。初任者が保育所や幼稚園といった施設類型による研修制度の違いによらず等しく学べ、生き生きとキャリアを積めることが、幼児教育の質の向上に繋がると考えているからです。

研修は年６回（園外・園内研修各３回）実施しています。園外研修では「美作市の幼児教育・保育士等育成指標」の講義等、子ども政策課と連携し、心理士や保健師による「共通支援シート」についての講話を行っています。また、公開保育を参観し保育の実践力を高める機会も設けています。この研修は、日頃の実践を振り返りながら、悩みや疑問を直接相談できるだけでなく解決の糸口を掴むことができると毎年好評です（写真１）。現代的課題である保護者支援や特別支援教育の研修も実施しています。保育士等育成指標を基に初任者自身が実践を振り返り、自らの強みと弱みをメタ認知しながらキャリアを積めるよう支援しています。



写真１　研修の様子

園内研修は、初任者が指導者と対話し、実践力を高めるために行う個別の研修です。初任者は指導案を作成・実践し、指導者が参観します。初任者に伴走し、幼児教育を担うホープを育てていくことが、幼児教育の質の向上につながると信じて取り組んでいます。

（2）解説書はバイブル

全ての研修において幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領のそれぞれの解説書を持参し、研修に臨むことも継続しています。そうすることで研修中も、解説に示されている幼児教育の基本に立ち戻ることができ、少しずつ職員の専門性が高まってきています。

3　連携・接続から架け橋プログラムへ

本市では、小学校区ごとに園・小で目指す子ども像を共有し、共同で作成した「連携年間計画表」

に従い様々な交流や研修を重ね、互いの教育について共感的理解を深めています。また、小学校区ごとにスタートカリキュラムを園・小が協働して作成し、子どもが安心して生き生きと小学校生活をスタートできるようにしています。3月に行う園・小の引継ぎ会には、幼児指導要録等や「共通支援シート」だけでなく、ドキュメンテーションによる学びの履歴も小学校へ送る等、丁寧な引継ぎも工夫しています。小学校では園から受け取った学びの履歴を教室に掲示しており、こうした学びの可視化は保護者の安心感にも繋がっています。このように地道に積み上げてきた幼保小連携・接続の成果を基盤として架け橋プログラムを推進しています。そして、一小学校区を架け橋プログラムモデル推進校に指定し（以下「指定校」という。）推進しています。

（1）「架け橋プログラム研修①」

5歳児・1年生担任による指定校1年生の授業参観を6月に実施しています。参観した生活科の授業では、担任は子どもが感じている不思議や気付きから本時の授業へと導入し、子どもの思いや願いに伴走しています。心理的安全性の確保された学級集団の中で、一人一人の子どもが場所や方法を自己選択し、気付きを友達と共有しながら楽しく学び合っています。授業参観後の架け橋期についての講話や協議を通して、「滑らかな接続から架け橋プログラムへ」の重要性を理解する機会としています。参加者から、「子どもが自己選択し主体的に活動する場面や、自己調整しながら協働的に学ぶ場面も参観でき勉強になった」等感想があり、日頃の保育や授業を振り返る貴重な視点を得ています。

（2）「架け橋プログラム研修②」

幼児教育を理解するためには、保育を体験することが有効だと考え、平成30年度から2つの研修（小学校教員保育体験・小中学校新規採用教員保育体験）を実施しています。

この研修では、子どもと活動をする中で、実感を伴った気付きを得る（写真2）。体験後には、園の教職員と共に遊びの中にある10の姿を見取ったり気付きを共有したりしながら、「遊びは学び」であることを理解します。参加者からは、「様々な仕掛け（環境）や先生のポジティブな声掛けを学んだ」等、感想があり、子どもが自ら考えたくなる仕掛けを授業に組み込む重要性等を共感的に理解している様子が伺えます。保育体験後のある初任者の1学期の振り返りを一部抜粋で紹介します。「初任者研修で赴いた園では、子どもが試行錯誤し自己の気付きや感覚をつぶやくと、それをすかさず保育士が拾い上げ共有・拡散する等、伴走者としての役割を果たしていた。そこでの子どもたちは『遊ぶ』ことを通して未知の世界と出合い、学習がなされていた。そこで、私が1学期に行った授業・学級経営の取組を『遊び』の視点から解釈し、教師の役割を省察することを通して、2学期の課題意識へと繋げていきたい。」この後、小学校長から、この初任者が意欲的に授業改革を試みた喜ばしいエピソードを伺うことができました。



写真2　保育体験

4　おわりに

小学校区ごとに取組の差はあるが、架け橋プログラムは確実に進んでいます。指定校では、教職員が互いのリスペクトを基に良好な関係を築き、架け橋期のカリキュラムも作成しました。1年生は行渋りも不登校もなく、「学校は楽しい」と通学しています。「ローマは1日にして成らず」「接続も架け橋も1日にして成らず」「繰り返し・みんなでやる」を合言葉に地道に取り組み、質の高い幼児教育から質の高い小学校教育へ滑らかに学びのバトンを繋ぎたい。そして、本市の子どもたちを誰一人取り残すことなく、生活や学びの基盤づくりをし、主体的・対話的で深い学びを実現できるよう支援したい。

事例紹介②

架け橋期の充実に向けた取組
～子どもをまんなかに つながる園小職員組織の構築～

■ 和気町教育委員会

1 はじめに

和気町内には佐伯、和気、本荘の3つのにこにこ園（幼保連携型認定こども園）があります。それぞれが小学校と隣接するなどの近い関係にありますが、以前は園の先生と小学校の先生の間に心理的な距離があり、お互いの実践を詳しく知る機会が限られていました。そこで、5歳児（年長児）から小学校1年生までの「架け橋期」に携わる先生を中心に、町全体で職員同士の連携を強化し、学びの連続性を確保するための様々な取組を行っています。

2 授業を一緒に作る ～合同授業～

園と小学校の連携を進める上で最も大きかったのが、園の先生と小学校の先生がチームを組み、共に45分間の授業を作り上げ、実践する合同授業の取組です。合同授業に向けた打合せでは、園の先生はこれまで園でやってきた遊びについて、小学校の先生は教科の目標や子どもたちに身に付けさせたい力を説明します。そして、園の経験が生かせる授業の流れを考えていきます。取組が始まる前は、園の先生と小学校の先生の間には心理的な距離がありましたが、合同授業の取組を通じて、お互いの顔が見える関係へと変化していきました。

合同授業では、園での遊びの経験を小学校の授業にどうつなげるかが重視されています。生活科の学習「なつだとびだそう（シャボン玉遊び）」では、子どもが、園での遊びの中で培ったシャボン玉の吹き加減の調整や、廃材での道具作りの経験を活かし、発展的な遊びを行う姿が見られました。取組初年度は、幼児期の遊びが学びへとつながりやすい生活科を中心に実施しましたが、令和6年度からは、全教科へと対象を広げました。令和6年度に実施した国語科「ものの名まえ」の学習では、授業に参加した園の先生が、写真やエピソードをもとに園でのお店屋さんごっこの経験を振り返り、子どもは店員とお客のやり取りを学習に活かす様子が見られました。


合同授業の取組（生活科）

授業の進め方も、実践を重ねる中で改善されました。当初は園の先生が主導する形もありましたが、現在は、小学校の先生が授業を進め、園の先生が子どもの補助や園での経験を想起させる言葉がけを行う形態で実施しています。これにより、子どもたちは、自信をもって園での遊び経験を小学校の授業で発揮できるようになっています。

3 園・小学校の生活を体験する ～保育体験、小学校体験～

先生同士がお互いの現場を深く理解するため、それぞれの施設での相互体験の取組を行っています。保育体験は、小学校の先生が

夏休み期間などを利用し、園で半日過ごす取組で、令和6年度にスタートしました。参加した小学校の先生からは、「子どもたちが『させられている』のではなく、『自分たちでしよう』と主体的に動いている姿に感動した。」「幼児期にこれほど多くのことができるようになっているとは知らなかった。」などの驚きの声があがるなど、実際に保育の現場を見ることで、小学校の先生の子ども観に大きな変化が生まれています。


小学校体験の取組（和気小学校）

一方、令和7年度からは、園の先生が小学校で半日過ごす小学校体験も始めました。参加した園の先生は、算数の授業で丸付けを手伝い、1年生の学習状況を肌で感じました。また、小学校の先生が、授業の合間に手遊びやゲームを取り入れるなど、園に近い環境を一部作ることで、子どもたちの気持ちの切り替えがスムーズになる工夫をしていることを目の当たりにしました。体験を通して、園の先生たちは、自分たちの保育が小学校の学びにどうつながっているかを具体的にイメージできるようになり、日々の保育をより深めるきっかけとなっています。


保育体験の取組（佐伯にこにこ園）

4　大切にしていること、さらなる理解促進に向けて

一連の取組を通じて、和気町が最も大切にしてきたのは「相手の顔が見える関係づくり」です。単発のイベントではなく、合同授業の打ち合わせや事後の協議を積み重ねることで、心理的な壁を取り払うことができ、お互いを「一緒に子どもを育てる仲間」と認識するように変わりました。現在、1年生が企画したおもちゃフェスティバルへの園児の招待や、園児が作った凧を小学校の広い校庭で一緒に揚げる取組、収穫した玉ねぎを使ったクッキングでの交流などが主体的に行われています。

そして、令和6年度末、園と小学校の先生、そして教育委員会が共同で「和気町立小学校・にこにこ園架け橋期カリキュラム」を作成しました。これは、5歳児と1年生の担任が、どのような力をつなげていくかという視点で話し合い、学期ごとの週案や時程を持ち寄って作り上げたものです。和気町では、先生の異動があってもこの仕組みが残り続けるよう、小学校区で共通の子ども像を共有しながら、人と人をつなぎ、資質・能力をつなぐ取組をこれからも続けていきます。


本荘小学校校庭で遊ぶ園児

和気町立小学校・にこにこ園
架け橋期カリキュラム

事例紹介③

ワーキンググループを活用した架け橋期のカリキュラム作成に向けた取組

■ 津山市教育委員会学校教育課
津山市こども保健部こども保育課

1 はじめに

津山市内には、現在、27の小学校と、33の幼稚園・保育園所・認定こども園が設置されています。津山市では、「架け橋プログラム」を推進するために、令和7年度からワーキンググループ（以下「WG」という。）を設置するなど、推進体制の整備も含め、園校のグループを再編し、本格的に取組をスタートさせました。ここでは、津山市の『ワーキンググループを活用した架け橋期のカリキュラム作成に向けた取組』を紹介します。

2 保幼こ小連携から「架け橋プログラム」へ

①これまでの取組

これまでも本市では、幼児教育から小学校教育への円滑な接続を目指し、連携体制の構築を進めてきました。平成30年度には、「津山市保幼こ小接続カリキュラム～遊びを学びにつなぐ～」を策定し、各園校において接続期の「アプローチカリキュラム」や「スタートカリキュラム」を作成し、連携に取り組んできました。具体的な活動としては、幼稚園や近隣の保育園と小学校との交流活動をはじめ、管理職を中心とする成果・課題の協議、担当者会での公開保育・公開授業などを重ね、相互理解と教育・保育内容の改善に努めてきました。

②取り組む中での課題

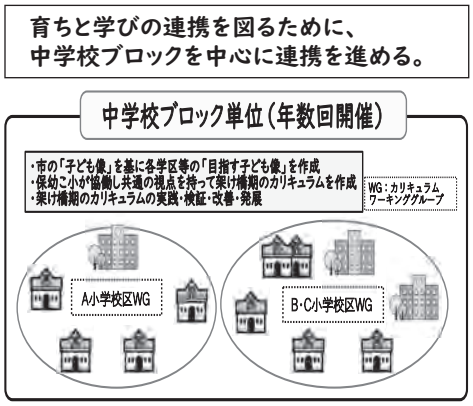
これまでの連携の積み重ねがある一方で、本市特有の構造的な課題も浮き彫りになっています。

まず規模の面において、一つの小学校に対して十数園から子どもたちが入学するケースがあり、個々の園校間で緊密な連携をとることが物理的に難しいという現状があります。また、設置形態が公立・私立の幼稚園、保育園、認定こども園と多岐にわたり、それぞれの保育・教育内容や環境、地域性が異なるため、市全体として目指すこども像への方向性が定まりにくいということが挙げられます。さらに、以前作成した接続カリキュラムの活用が現場に十分に浸透しておらず、各園校の日常的な連携が期待ほど進んでいないことも課題となっています。

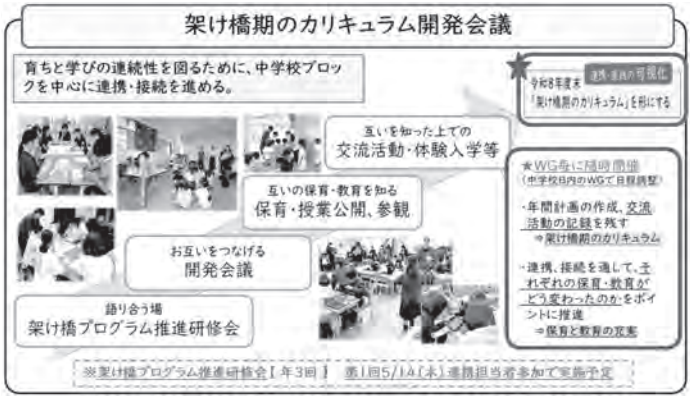
③ワーキンググループの設置と推進のための取組

本市の課題をもとに、令和7年度より「津山市架け橋プログラム」を推進していくにあたり、まず一番の課題である多くの園校をつなぎ、広域な連携を実効性のあるものにするために、WGを「中学校ブロック単位」で、これまでのつながり（連携先）や現状など、アンケートをもとに把握し、20のWGに再編しました。

各中学校ブロックでカリキュラム開発会議を開催し、本市の基本方針をもとにWGごとの「目指すこども像」を共有し、保幼こ小が協働して共通の視点に立った「架け橋期のカリキュラム」の作成を進めています。ただカリキュラム



中学校ブロック単位・WG



架け橋期のカリキュラム開発会議

作成をするだけなく、合同研修会、保育・授業の相互参観、小学校教員による保育体験などが活性化しており、一部の担当者だけでなく全教職員・保育者が関わる組織づくりを進めています。また、「架け橋期のカリキュラム」として可視化することで、管理職が変わっても、担任が変わっても、子どもの学びの連続性が途切れない持続可能な連携体制の構築を推進しているところです。

3 ワーキンググループの取組 ～架け橋プログラムで豊かな学びへ～

架け橋プログラムを推進していくために取り組んでいる3つの核となる取組を紹介します。

①先生がつながる（異校種間交流・相互理解）

これまで保育・教育をそれぞれの立場で行ってきた園の保育者と小学校の教員が、立場を越えて顔を合わせて対話し、互いの専門性を学び合う場を設定して取り組んでいます。教員も、「園で意図的に行われている支援や学びを見取ることができ、これを小学校へつなげるためにも参観の機会は非常に大切だと感じた」との声も多く聞かれています。また、当初は距離感やぎこちなさが残っていた連携も回数を重ねるごとに子どもを主語にした対話が増え、具体的な活動がそれぞれのWGで見られるようになってきました。



WGの協議の様子

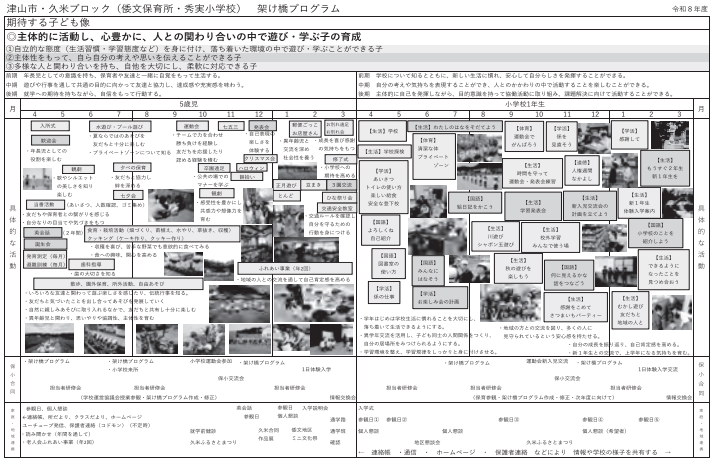
②子どもがつながる（日常的交流・安心感の醸成）

子どもたちが小学校への入学に対して、「楽しみ」や「期待」をもてるよう、日常の延長線上にある自然な交流活動を大切に、園から小学校へ見学に行く機会を意識的に増やしているほか、小学校の施設や行事を活用した交流を実施しています。また、交流するだけでなく、一緒に生活科で秋見つけをしたり、体育で縄跳びをしたりしながら、一緒に活動し、「育ちと学びをつなぐ」活動も増えてきています。

③育ちと学びがつながる（接続カリキュラム、保育・授業改善）

幼児期における「遊びを通した総合的な学び」を、小学校での「教科等の学習を中心とした自覚的な学び」へと円滑につなぐカリキュラム開発を進めています。

中学校ブロックで、「目指す子ども像」を共有した上で、WGでは、各園校が具体的な活動や子どもの姿を共有し合い、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10の姿）の観点を手掛かりに、幼児期の経験と学習内容を関連づけ、幼児期の探究的な学びから小学校の教科教育の円滑な接続になるよう、「どんな力を育みたいか」を実際の子どもの姿で語り合い、記録を残しつつ、事例をもとに対話を重ねています。



【一例・作成途中】架け橋期のカリキュラム
エピソード記録や子どもの姿をもとに園校一緒に作成

4 おわりに

架け橋プログラムは、これまで積み重ねてきた取組を大きく変えるものではありません。互いの専門性を知り、対話を重ねる中で新たな視点が生まれ、日々の意識や子どもへの声かけが自然と変わっていき、その内側からの変化や気付きを記録として残しながら歩みを進めることが、何よりも重要な一歩となります。今後も、市全体、そしてWGでの持続可能な接続・連携体制の構築を推進してまいります。

子どもの声　保護者の声　地域の声

11月のテーマ：「幼保小の接続の充実」

［児童から］2年生になっても頑張りたい

こども園の時に頑張っていたことを思い出しながら、発表したり思いを書いたりしています。年長さんの時に下の子のお世話をすることがありました。だから、その時のように、2年生になったら1年生と学校探検をして、小学校のことをしっかりと教えてあげられるようにしたいと思います。

（和気小学校　1年生）

［教職員（こども園）から］小学校が身近な存在に

芳形　奈津子

園小が連携して合同授業を行うことができ、本当にありがたいと感じています。卒園していった子どもたちが、小学校で頑張っているのがよく分かります。「園ではこのようにやっているけれど、1年生ではどうなのかな。」と思った時に、小学校の先生に気軽に尋ねることができるようになりました。小学校とこども園の距離が近くなっていると実感しています。

（和気にこにこ園　保育教諭）

［教職員（小学校）から］できることは自分で

草加　裕子

「子どもたちは自分でできることがたくさんある」と園の先生から教えていただきました。園訪問をする中で、私自身「子どもたちができることは、自分でできるチャンスを作っていきたい。」と思うようになりました。「園ではどのようにしていたかな?」「園でこんな経験をしたことある?」と園児に聞く回数が増えました。また、「こんなことはできるって聞いたよ!」と、児童に伝えながら取り組むことも増えました。

（和気小学校　指導教諭）

［教職員（小学校長）から］子どもの安心感と教員の変化の実感

髙坂　満弓

1年間を通じて、園小の子どもが交流する機会があります。継続的に取り組むことで、子どもたちにも安心感が生まれていると感じています。交流を重ねる中で、園児も小学校の先生のことを覚えてくれていると感じ、年度当初のギャップ解消につながっていると思います。「架け橋期」を意識することで、先生方の言葉遣いや立ち位置、授業構成などにも大きな変化がありました。

（和気小学校　校長）

写真だより
Photo News

【全国中学校体育大会】全力で挑んだ夏！ 岡山で繰り広げられた熱戦

中国地方５県で全国中学校体育大会が開催されました。岡山県ではハンドボール、柔道、卓球、ソフトボールの４競技が行われ、全国の厳しい予選を勝ち抜いた中学生アスリートたちが熱戦を繰り広げました。コートや畳の上で見せた全力のプレーと爽やかな笑顔が、会場全体に大きな感動を届けました。


ハンドボール


キーパーが相手のシュートを防ぎ、喜びの瞬間


柔道


息をのむ組み合いの瞬間


卓球


スマッシュが決まった瞬間


ソフトボール


得点した時はみんなでガッツポーズ


中村教育庁も応援に駆けつけました

県立学校の生徒の活躍を詳しく紹介！
県教育委員会の取組や、教員採用試験についても紹介していますよ

岡山県教育委員会公式note

【県立総社南高校】

「Let's study with ジャミ生」で小高交流が行われました

7月27日、総社南高校で「Let' s study with ジャミ生」が開催されました。「やじろべえ作り」や「コマ作り」など「バランスを楽しもう!」をテーマに小学生と交流しました。



重心について説明中



身近な道具で重心を体験中



高校生がサポートしながら作成中

【県立博物館】

「教員のための博物館の日in岡山県立博物館2026」が開催されました

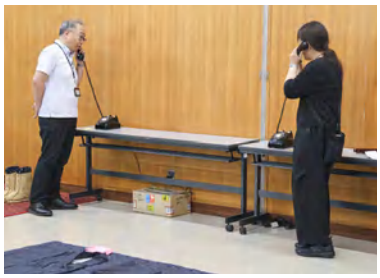
8月4日、岡山県立博物館で「教員のための博物館の日」が開催されました。授業のヒントにしてほしいという思いで開催され、館内授業や出前授業、実際の展示物などが紹介されました。



教員を目指す学生も参加しました



実際の展示物を見ながら
授業のヒントを探します



黒電話の体験もできます

【県立興陽高校】

造園×茶道が魅せる伝統。庭園に彩られたお茶会が開催されました。

7月20日、興陽高校の同窓会館で茶道部によるお茶会が開催されました。造園デザイン科の生徒が手入れを重ねた庭園を眺めながら、茶道部がお茶を点てました。



造園デザイン科の生徒が丁寧に剪定しています



同窓会館に集まる茶道部



心を込めてお茶を点てます

【県教育委員会】
ＡＬＴ（外国語指導助手）感謝状贈呈式＆辞令交付式を開催しました

７月10日、任期を満了されたＡＬＴ（外国語指導助手）の皆さんへの感謝状贈呈式が、８月10日には新しくお迎えするＡＬＴの皆さんへの辞令交付式が行われました。

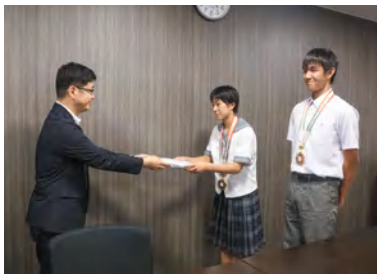

感謝状贈呈


記念撮影（感謝状贈呈式）


記念撮影（辞令交付式）

【表敬訪問】インターハイで優勝した高校生が教育長を表敬訪問しました

バドミントン女子シングルスで優勝した倉敷中央高校　渡邉　柚乃さん（２年）と自転車競技１㎞タイムトライアルで優勝した岡山工業高校　松尾　泰成さん（３年）が中村教育長に優勝を報告しました。


渡邉　柚乃さん（写真中央）
（倉敷中央高校２年）


松尾　泰成さん（写真中央）
（岡山工業高校３年）


記念撮影

【県教育委員会】「OKAYAMAゆめスマサミット2026」が開催されました

８月３日、岡山国際交流センターに県内の中学生・高校生が集まり、スマートフォンやインターネットの適切な利用や校則のあり方、誰もが行きたくなる学校づくりについて協議を行いました。


活発に意見を交わす様子


鍵本　芳明 先生によるご講演
（岡山大学大学院教育学研究科　教授）


記念撮影

【県教育委員会】
「GIGA第2期の授業改善推進フォーラム2026」が開催されました

次期学習指導要領の改訂が目前に迫る中、全国のトップランナーをお招きして「デジタル学習基盤の活用を前提とした授業改善」の一助とするためのフォーラムが8月20日に開催されました。



文部科学省 初等中等教育局
参事官　浅原 寛子 氏



京都大学 大学院教育学研究科
教授　西岡 加名恵 氏



愛知県春日井市教育委員会教育研究所
教育DX推進専門官　水谷 年孝 氏

【県立玉野高校】
伝達スキルを高めます!Canvaデザイン講座が開催されました

8月26日、「効果的に伝えるスキル」を身に付けるために、玉野高校の2年生がプロのデザイナーから学ぶ「Canvaデザイン講座」に取り組みました。



シトリンデザイン代表　石井梨奈さん



作成したデザインをお互いに披露



先生の名刺デザインを作成中

【表敬訪問】「第21回若年者ものづくり競技大会」で金賞を受賞しました

「第21回若年者ものづくり競技大会」で金賞（厚生労働大臣賞）を受賞した県立興陽高校造園デザイン科　小早川　桃葉さん（2年）が岡山県産業労働部長を表敬訪問しました。



競技中の様子



産業労働部長へ作品のこだわりを
説明する小早川さん



記念撮影

随想



教師の仕事

森井（もりい）　歩美（あゆみ）



子どもたちのもっている力を引き出すことこそが私たち教師の仕事である――。知ったつもりでいたこの言葉の本当の意味を、私は他でもない1年生の子どもたちに教えられた。

昨年度、教職13年目にして、初めて1年生の担任をした。入学してきたばかりの子どもたちの中には、教室に入れずに泣き叫ぶ子ども、順番を待つことができずに怒る子ども、授業中に自分の席に座っておくことができない子どもなど、さまざまな「できない」を抱える子どもたちがいた。

だが、月日の流れとともに、教室の景色は静かに、けれど確実に変わっていった。朝、私が教室に行く前に、子どもたちは自分でランドセルを片付け、準備を済ませている。給食の時間になれば、誰からともなく声を掛け合い、時間通りに配膳を終える。トイレで失敗した子がいたとしても、冷やかすことなくそっと見守る優しさも芽生えた。

これらは、私が手取り足取り教え込んだからではない。私がしたのは、失敗しても大丈夫な温かい学級風土をつくること、子どもたちが「自分たちでできる」と信じて待つこと、そして「自分たちでできたね」と認めることだった。直接教え込むのではなく、自ら気付き行動できる環境を整えることで、子どもたちは確実に成長していった。

そうやって「自分たちでできる」という自信をもった子どもたちは、さらに自らの力を発揮していく。

例年であれば、教師が決めた内容（劇や音楽など）を覚え、発表するだけだった学習発表会でも、私は「みんなはどんなことをおうちの人に見せたい？」と問いかけ、決定権を委ねてみた。すると、子どもたちは発表の内容を自分たちで話し合って決め、グループごとに自主的に練習し、見事に本番をやり切ったのである。「子どもだからできない」という大人の先入観が、どれほど彼らの可能性を狭めていたかを痛感した瞬間だった。

「子どもだから分からない」「1年生だからできない」といった言葉を学校現場でもよく耳にするが、私はこのことに異を唱えたい。子どもたちは私たちが思う以上に、さまざまなことを分かっているし、できる力を秘めている。

子どもたちの力を信じて安心できる居場所をつくり、適切な問いかけで「やりたい！」に火をつけ、その力を最大限に引き出すことこそが、私たち教師の本当の仕事なのだと思う。

（岡山市立旭竜小学校　教諭）

巡る季節

井上（いのうえ）　将人（まさと）



教育時報への寄稿のお話をいただき、これまでのことを振り返っているうちに、20年ほど前のことを思い出した。娘が私と同じ保育園に通っていた頃、創立五十周年記念誌への寄稿を依頼され、親子

二代で同じ保育園に通えた喜びを綴ったことがあった。先日、その記念誌を見つけ、久しぶりにページを開いてみた。親子で同じ保育園に通い、遊び着も同じ形のものだった。園から帰ってくると、ポケットやカバンには、葉っぱやドングリなど、その日に見つけたものが入っていた。そんな何気ない日々を、20年前の私は記念誌に綴っていた。

あの頃は、娘の成長がただうれしかった。その先に、娘が大人になり、新しい命を迎え、母親となる日が来ることなど想像もしなかった。娘は立春の日に生まれた。まだ寒さの厳しい季節だったが、わが家には春が訪れたような喜びがあった。「春を運んできてくれた子だね」と家族で話したことを、今でも覚えている。子育ての日々は、仕事との両立に追われ、めまぐるしく過ぎていった。振り返れば、家族と過ごした何気ない時間が、かけがえのない思い出として残っている。

教育の仕事を通して、これまで多くの子どもたちの成長を見守ってきた。日々の学校生活の中で、子どもたちが少しずつ成長していく姿を見ることは、教育に携わる者として大きな喜びである。その姿に立ち会うたび、人が成長することの素晴らしさを教えられてきた。そして今、自分の家族も、次の世代へと時間がつながろうとしている。

この夏、義父を見送った。初孫の誕生を心待ちにしていたが、その願いはかなわなかった。その別れを経験して、ふと、25年前のことが思い出された。娘が生まれる半月ほど前、私も祖父を亡くした。25年前と今年、季節は違っても、私の中に残る思いはどこか似ている。巡る季節の中で、今年ほど命のつながりを感じた年はない。9月、新しい命を抱く日には、立春の日のことを思い出すのかもしれない。

（真庭市立落合中学校　教頭）

今しかできない経験

馬場（ばば）　直樹（なおき）



特別支援学校に勤務して約1年半。仕事にも慣れ、見通しをもって取り組めるようになってきた。前任校での人事異動の時期、校長から「特別支援学校はどうか」と打診された時の驚きは今も覚えている。まさかの異動先だったが、過去に知的学級や自閉・情緒学級を担任した経験から興味もあり、挑戦してみることにした。

実際に働き始めると、小学校とのギャップをいくつも感じた。授業形態や児童への支援の仕方、そして働き方。慣れるまで時間はかかったが、相担任の先生に教わりながら1年目を乗り切ることができた。

最近、ここで学んだことを小学校に戻った際、どう活かせるか考えることがある。思い出すのは、初任の時に担任した多動性のある児童だ。たびたび教室を抜け出し、癇癪を起こして物を投げることもあった。多くの先生に助けられ、彼が保健室や相談室で過ごす時間も多かった。私は空き時間を見つけては一緒に遊び、関係性を切らさないよう努めた。今思えば、見通しをもてるようスケジュールを提示したり、活動を選択できるようにしたりと、具体的な支援方法はあったはずだ。しかし、当時の私は日々の業務で手いっぱいで、有効な手立てを打てなかった。その悔しさは、今の私の原動力となっている。

先日、交流及び共同学習として、学年で育てた野菜を使い小学校の児童と一緒にカレーライスを作った。本校の児童にとって初めての調理実習で不安もあったが、包丁を使う交流校の児童の姿を見て「自分もやってみたい」と意欲を見せる児童がいた。交流校の児童も、本校の児童にどう関わるか、言葉かけを工夫しながら接する姿がよく見られた。お互いにとって良い経験となり、両方の立場を知る私にとっても大きな学びの場となった。

教員になって9年目。今しかできない経験を積み、目の前の児童により良い支援ができるよう、これからも力を付けていきたい。

（県立東備支援学校　教諭）

岡山県立図書館　教育関係図書紹介

教育関係の新着図書からピックアップしてご紹介します

生徒の探究心を広げる 「探究」の言葉がけ

藤原 彪人，浅見 和寿 ／著　学事出版
2025.12　請求記号：375.1/ﾌｼ26/　ISBN：9784761930882



生徒の主体性を保ちながら、問いを深めるために有効な言葉がけの具体例を、探究学習の場面ごとに多数紹介しています。言葉がけのポイントやNG例についても解説され、日々の生徒とのやり取りに活用しやすい内容です。

自己調整学習はじめの一歩
中学校・高校での授業づくりのヒント

福本 雅俊，篠ヶ谷 圭太／編著　東洋館出版社
2026.3　請求記号：375.1/ﾌｸ26/　ISBN：9784491063478



本書では、自己調整学習の考え方と授業への取り入れ方を、中学校・高校の実践例を交えて分かりやすく解説しています。生徒の特徴や状況に合わせた情報提供や働きかけの手法が身につく一冊です。

視覚支援を活かした 教室環境づくりアイデア集
クラスのみんなが快適に過ごせる

竹澤 萌／著　中央法規出版
2026.3　請求記号：374.12/ﾀｹ26/　ISBN：9784824304056



音に敏感な子への配慮、給食のための安全な動線づくりなど、特別支援の視点を取り入れた教室環境づくりの工夫が多数紹介されています。子どもの安心感や愛着を育て、自ら動きだせるようにするためのアイデアが満載です。

「むずかしい」学級の構造

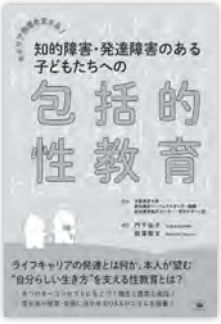
小野 領一／著　東洋館出版社
2026.2　請求記号：374.12/ｵﾉ26/　ISBN：9784491063577



生徒指導が多く、授業が成り立ちにくい「むずかしい」学級に勤めた著者が、背景の構造や要因を多角的に解説し、成長へ導く10の原則を紹介しています。「こうでなければならない」という枠を外し、視野を広げられる一冊です。

知的障害・発達障害のある子どもたちへの 包括的性教育

京都教育大学教育創生リージョナルセンター機構
総合教育臨床センター・学びサポート室／監修　門下祐子，相澤雅文／編著
クリエイツかもがわ　2026.3
請求記号：378.6/ﾓ326/
ISBN：9784863424128



知的・発達障害のある児童生徒への包括的性教育を、ライフキャリアの視点を交えて解説しています。実践例やQ&Aが豊富に紹介されており、児童生徒の「自分らしい生き方」の実現に役立つ一冊です。

高等学校の通級による指導
個別最適な学びと校内体制づくり

大西 孝志，首藤 啓美子，中川 正規／編著
ジアース教育新社　2026.3　請求記号：378/ﾀｶ26/
ISBN：9784863717572



高校で通級による指導を受けている生徒は、制度開始当初から約５倍に増加しています。本書は、授業づくりから校内体制の整備まで先進的な取組を行っている10校の事例を紹介しており、実践のためのヒントが見つかります。

岡山県立図書館

県立図書館のHPをチェック!!!

☆ 教育活動支援サービスの詳しい内容や教育新着バックナンバー
【サービス案内】→【資料の収集・提供・相談サービス】→【教育活動支援サービス】

☆ ご相談は、社会科学カウンター（社会科学班）までお気軽にどうぞ。
E-mail：syakai@libnet.pref.okayama.jp　TEL：086-224-1317

中高生 なんでもトーク 292

みんなで築く　誇り・絆

瀬戸内市立長船中学校　3年　青木（あおき）　麗々愛（りりあ）

「僕らのＢｒａｎｄ　君に届け～誇り・絆～」これは十数年間掲げられている長船中学校の生徒会スローガンだ。スローガンは、さまざまな縁の繋がりを通して今に至っている。

特に私は「絆」が東日本大震災後に長船中の生徒が宮城県に支援物資として贈った技術の授業で作ったラジオをきっかけとして、石巻市の渡波（わたのは）中学校への支援を行い始め、2校の間に絆が生まれたことから付け加えられたことを知り、とても感動した。

生徒会スローガンには、自分たちが今まで以上に、長船中学校のことを「誇り」に思えると共に、「絆」がある学校にしていくという決意が込められている。

私は数ある行事の中でも、長船中の誇りや絆が培われるのは希絆祭（きずなさい）だと思う。希絆祭の名前に込められた「希望」と「絆」。これもまた、被災地との縁から生まれた思いだ。

合唱コンクールを中心にした希絆祭が近くなると毎日、学校全体から歌声が聞こえてくる。学年優勝を目指して、練習した私たちの心には、当日歌い終わった後、クラスみんなでやり切ったという感動が込み上げてくる。学校全体を包む一体感と「絆」に涙する仲間たちもいる。

私たち3年生にとって最後となる今年の希絆祭もまたきっと白熱し、さらに感動と絆を生むものになるだろう。

私たち一人一人がさまざまな体験を通して、成長してきたように、スローガンもまたいつか変わってしまうかも知れない。しかし、明るく活気のある長船中学校らしさはなくならないと思う。

私は改めて、スローガンができる過程を知り、さらに長船中学校を魅力的に思えるようになった。同時に、このスローガンができた過程を後輩たちにも伝えていきたいと思った。

失敗おめでとう

県立高梁城南高等学校　電気科2年　小原（こばら）　大輝（だいき）

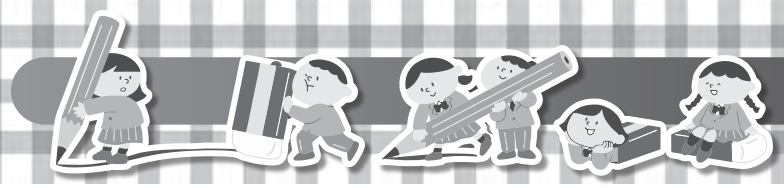
私は未知の世界へ飛び込み、人生において貴重な経験をしています。

私の通う県立高梁城南高校では昨年度「ＪＯＮＡＮホールディングス株式会社」と言う工業系・農業系の公立高校において日本初となる株式会社を設立するという大きな挑戦をしました。現在私は、そこでＣＯＯ（副社長）を務めています。多くの業務に関わる中で、全てが順調に進む事はなく、これまでに、社内の小さな問題から外部に関わる大きな問題まで幅広い失敗をしました。しかし、「失敗おめでとう」の精神で捉える事で、ただ失敗として終わらせず原因を分析し、次に繋げました。その都度自分で記録を残すと、後から見返した際に当時の状況を客観的に考えられ新しい視点で捉えられます。自身の成長だけではなく、後輩へスムーズに失敗を共有できる利点もありました。

私の行動力が身についたのは、中学生の頃、当時の先生が校外に出る楽しさを教えてくれた事がきっかけだと思います。初めはボランティアや外部に出る事を「怖い・分からない」と勝手に決めつけて行こうとすらしませんでした。しかし誘われて行ってみると、全てが初めてで大変でしたが、それ以上に面白さや充実感があり、「未知の場所へ飛び込む事」を経験できました。その頃の活動は今の高校生活にも大きく影響しています。

現在、県外のイベントに招待して頂くこともあるのですが、その際、初対面の大人とも話せるようになりました。それは普段から大人と関わっているからこそ失敗を恐れず堂々と振る舞えるのだと思います。

中学校時代に一歩踏み出した経験があったからこそ、私は今、数多くの貴重な学びを得ています。今後も未知の世界へ飛び込み、多くを学びたいです。



チーム全員の努力で得たもの

県立岡山朝日高等学校　化学部

我々朝日高校化学部は、令和7年10月に開催された「サイエンスチャレンジ岡山2025」で、2年が1位優勝、1年が2位を勝ち取り「第15回科学の甲子園全国大会」の出場権を獲得しました。

「科学の甲子園」は、全国の高校生が数学・物理・化学・生物・地学・情報の六分野に関する力を筆記競技とものづくり（工学）を含む3種目の実技競技の総合成績で競う、全国トップレベルの学校対抗の競技会です。

我々は1年生を含めた8人で参加しました。競技内容が公開されるのは一競技のみで他は非公開ですが、チーム全員で過去の内容を調べ、ミーティングを繰り返して対策を練りました。自分が出場しない競技でも互いに協力しあい、公開競技では大会参加の前日まで工夫と練習を重ねました。当日は緊張の中で無我夢中で取り組み、公開競技では優れた得点で第1位、他の競技も頑張った結果、岡山県初の総合優勝を勝ち取ることができました。「優勝、岡山県代表岡山県立岡山朝日高等学校」と呼ばれた瞬間は、今でも忘れられません。

この成果により5月にアメリカで開催された「サイエンスオリンピアド2026」の出場権を得て、海外の高校生と競技・交流することができました。世界を見て、戦ってきた経験は、私たちの人生の基盤となると確信しています。



高校生「夢育」PBLフォーラム2026

日　時　令和8年12月25日（金）9:50～16:30
開催場所　ホテルグランヴィア岡山
参加校　全ての県立高校を含む57校・86グループ
内　容　高校生によるPBLの発表

探究の最前線がここにある。
未来を切り拓く高校生たちの挑戦！

STEAMの視点を取り入れ、地域や社会の
リアルな課題へ主体的に挑んだ高校生たちの
熱い想いが結集します。
臨場感あふれる「ステージ発表」と
対話が弾む「ポスターセッション」。
次世代が放つ圧倒的なエネルギーと可能性を
ぜひ会場で体感してください！

【お問い合わせ】
岡山県教育庁高校教育課
（086）226－7585

【PBLフォーラムサイトURL】
https://sites.google.com/gse.okayama-c.ed.jp/pbl/pblforum2026

観覧申込みは
コチラから!

昨年度の様子



私の工夫

避難訓練の実効性を高める！
～「他人事」から「自分事」へ～

倉敷市立船穂小学校
教諭　中原　洋子



1　はじめに

今から8年余り前、平成30年7月豪雨により、倉敷市真備町は甚大な被害に見舞われた。当時、私は真備町にある菌小学校に勤務していた。2学期の学校再開後、私たち教職員は、災害の教訓を生かすべく、防災学習の開発や学校防災マニュアルの見直し等に取り組んだ。特に、避難訓練については、旧態依然とした内容では、「いつでもどこでも一人でも自分の命を守りきる」力を児童につけることができないと考え、実効性を高めるための工夫改善を図った。

2　避難訓練の実効性を高めるために

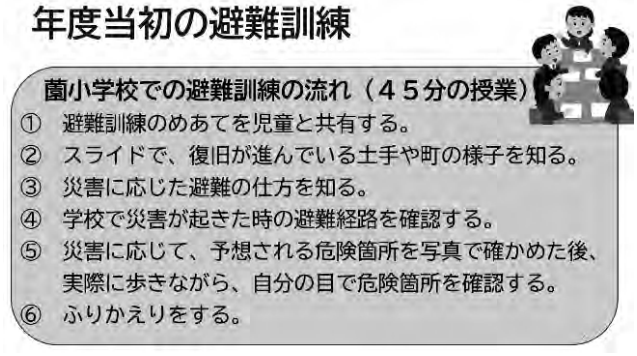
（1）「災害に応じた　避難の仕方を学ぶ」第1回避難訓練

【自分事にする】

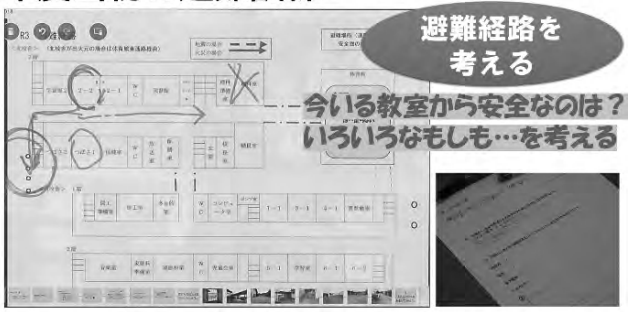
4月、最初の避難訓練は、各教室で、座学から始まる。流れは、資料1のとおりである。地震、津波、大雨…などによる災害に応じた避難行動について、自分で考え、友達と話し合う。次に、ワークシート（校舎配置図）に、災害に応じた避難経路を自分で考え、書き込み、話し合う。（資料2）そして、実際に校内を歩きながら、自ら考えた避難経路と危険個所を自分の目で確かめる。最後に、自分の気付きを振り返る。

それまでは、災害別に避難訓練を実施してきた。そして、児童は、教職員の指示・誘導により、与えられた経路を通るという訓練をしてきた。他人事の訓練を積み重ねても、自分事にはならない。

年度当初の第1回避難訓練において、児童一人一人が様々な災害を想像し、避難行動を自ら考え、それを確認する時間を確保したことは、「自分ならどう行動するか」と、命を守ることを自分事にする第一歩となった。「地震が発生したら階段の窓ガラスは割れているかもしれない」「電柱が倒れてくると通れない」など、防災の視点で周りの環境を見つめ直す児童も増えていった。



資料1　第1回避難訓練の流れ



資料2　校舎配置図を使って避難経路を考える場面



教室からの避難経路を歩いて確かめる様子

（2）「予想外のアクシデントのある」避難訓練

【想定外に対応する】

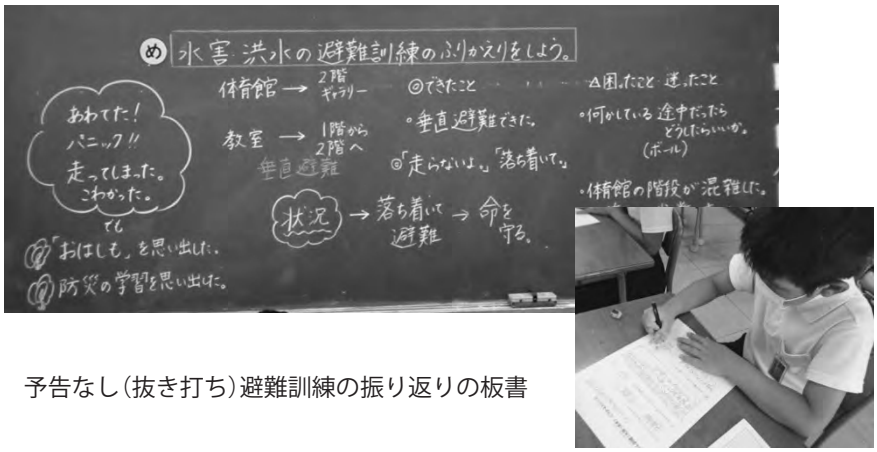
避難訓練の実効性とは、現実の災害に対応できる力をつけることができるかどうかで決まる。従来の避難訓練は、実施すること自体

が目的になっていた。あらかじめ細かく決められた実施要項どおりに児童が避難することを目指すものであった。しかし、災害は、想定外の中で起きる。教職員はいつもそばにいるわけではない。たった一人でも避難時の正しい行動をとらなければならない。

そこで、アクシデントを意図的に組み込んだ避難訓練を計画した。これは、避難訓練は、「練習」であり、「間違える場」として捉え直したからである。うまくいかなくてもよい。訓練を通して、児童自身が課題を見つけ、最適な避難行動を導き出すことが大切である。災害時（「本番」）に、自ら判断して命を守る行動をとるための訓練なのだから…。

予想外のアクシデントには、避難経路の障害物、避難場所の被害、停電、放送機器の故障、ガラスの破片、児童のけが…など、実際の災害で想定される様々なものを試みた。また、予告なし（抜き打ち）も、想定外の一つとして実施した。これらのアクシデントは、担当者と管理職など一部の教員のみが知っているだけで行った。児童だけでなく、教職員にとっても、シナリオどおりではない状況下での初動対応、臨機応変な行動選択が試される。まさかのときの自己判断力を鍛えられるのである。

こうした避難訓練では、事後指導や振り返りが特に重要となる。訓練の中で児童が感じた迷いや、うまくいかなかったことなどを出し合い、どうすればよかったかを話し合うことで、たくさんの想定内が積み上がっていくからである。この積み重ねが、「いつでもどこでも一人でも自分の命を守りきる」力を高めることになると考えている。



予告なし（抜き打ち）避難訓練の振り返りの板書



児童のふりかえりシート

（3）教職員の役割の転換

【見守り・観察・記録】

これまで述べたように、想定外に対応する力を高める避難訓練においては、教職員の役割も変わらなければならない。児童に指示を与え、先導する教職員から、児童の行動を見守り、観察する教職員への転換が重要である。

児童の動きを観察する中で、判断に迷っている様子や困っている状況、仲間と協力している場面等も記録する。振り返りでは、その記録をもとに、児童に「なぜ、そうしたのか？」と問いかけたり、判断の根拠を確かめたりするのである。児童が、自分や友達の避難行動について積極的に話し合い、自ら次の課題を見つける姿は、避難訓練の見直しの成果と言える。

3　おわりに

避難訓練は、どの学校でも毎年実施している防災教育の一つである。避難訓練の実効性を高めることは、命を失わない力を高めることにつながっている。今後も、自分事として、想定外に対応する避難訓練となるよう、毎年、毎回の実施内容を見直しながら、アップデートしていきたい。

非常時は平常時とつながっている。日頃から想像力を高めて、「もしも」に備えることが重要である。西日本豪雨災害で得た教訓を風化させず、生涯にわたって自分の命も大切な人の命も守ることのできる防災教育の充実を図っていきたい。



教職員が児童の避難の様子を見守る様子

私の工夫

先生方が学び続けられる学校へ
―対話が循環する仕組みづくり―

津山市立中道中学校
指導教諭　西川　裕美



授業改革推進チームの一員として7年目を迎えた。授業は担当していないが、生徒とのやりとりや先生方との対話など、学ぶ楽しみに支えられる日々だ。生徒も先生も安心して笑顔で登校し、多くの学びがあったと感謝しながら下校する。そんな学校づくりのお手伝いをしたい。

今年度は津山市内8つの中学校を兼務している。どの学校でも、先生方が力を尽くされていて頭が下がる。ただ先生方は見返りを求めてはいないが「手ごたえ」がないと苦しく感じる。だからこそ「手ごたえ」を感じられる対話のある環境や仕組みを整えることを目指している。

参観する際は、生徒（学習者）の視点で入室する。生徒と授業者の表情に注目し、授業後の対話の材料を集め、やりとりを通して「ともに学ぶ」姿勢を大切にしている。ここからは、先生方と試行錯誤しながら整えている環境や仕組みを4つ紹介する。

①ともに学ぶ視察
～学びを「つなぐ」仕組み～

毎年、授業改革推進チームで先進校を視察し、夏休みにその内容を市内の研究主任・学力向上担当者会（兼地区別研究協議会）で報告している。2学期には関連する内容の実践校への視察を企画し、先生方とともに学ぶ。できる限り視察を自校の実践や「提案授業」につなぐことを意識してきた。

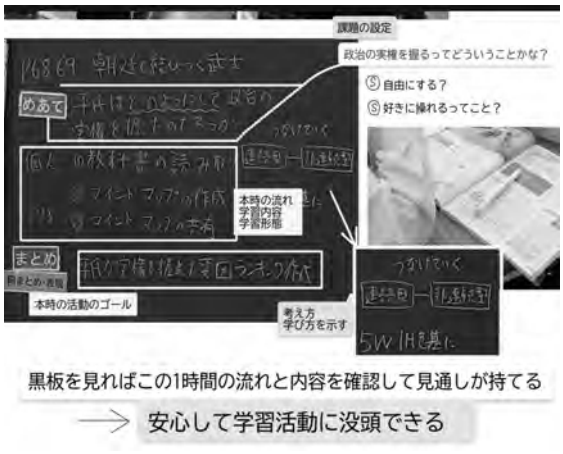
兵庫県洲本市立青雲中学校には愛知県春日井市の視察後、令和6年11月から3度訪問した。初回は帰路において学びを整理し「津山での実践」を話し合った。翌月には参加者が授業を公開し、約20名で協議することができた。さらに、ホームページや通信によって学びを広げ、令和7年2月、10月の再訪も合わせ延べ7校から参加を得ることができた。



授業改革推進（津山・中学校）チーム
ホームページ

②視察を重ねる
～学びを「深める」仕組み～

令和5年度の県外視察で訪れた兵庫県たつの市には、令和7年10月、令和8年2月に再訪した。特に、3度視察した龍野東中学校では、授業者や生徒の変容を継続的に見取ることができた。同行した方と気づきを共有する時間は、授業参観と同じくらい学びが深まるものだった。



龍野東中視察時の授業　板書

また、令和7年12月には、令和5年度の県外視察で授業を公開された先生を津山市の授業研究会にお招きし、授業づくりやデジタル教科書の活用等についてご指導いただいた。視察が単発の学びで終わるのではなく、津山市の実践をつなげることで、学びが継続する機会となった。

③ともにつくる授業 ～学びを「協働する」仕組み～



津山市学校教育研究センター公開授業

津山市では、研究組織（学校教育研究センター）の活動として、各教科で公開授業を実施している。令和7年度の中学校社会科部会では、小規模校勤務の授業者を本務校の社会科部会にお迎えし、授業づくりをともに進める場を設定した。部会テーマを踏まえ、「資料調べ」にとどまらず、「思考したことを表現するために必要な知識を自ら獲得する学び」の設計について協議した。対話を通して、多様な視点で構想を広げることができた。

今年度は夏季研修会において、参加者が公開授業の構想を練る活動を設定した。教科書を読んで対話し、各自で場面設計案を作成した。主体的な参観や研究協議につながると期待している。

④対話を日常にする ～学びを「文化」にする仕組み～

本務校では、毎週木曜日に研究部会を設定している。研究主任が中心となり、担当者とともに、研修や定例の教科会、授業づくりについて対話している。不定期で教頭や教務主任も参加し、様々な視点から自身や生徒の学びについて、今後の方針を具体的に協議する場面が増えている。私自身は、兼務校や視察で得た情報を持ち寄り、対話の一助となるよう努めている。

この積み重ねのうえに、今年度は研究主任・学力向上担当者が中心となり、希望者が集まる場（通称「カフェマウンテン」）が開かれている。役職や教科を越えて自由に語り合う場である。研修ではなく「話したい（聞きたい）から集まる」対話の場が根付きつつあることに、学校文化が少しずつ変わっていると感じる。

生徒も先生方も「来てよかった」と思える学校でありたい。そのために、組織的・計画的な研修と日々の対話が大切だと感じる。紹介した4つの取組に共通するのは、一人ひとりの学びを支えるやりとりや対話を、個人の経験で終わらせず組織の学びへ「つなぐ」という意図である。これからも先生方との対話を通して得た学びを生かし、学校の中に対話が循環し、先生方が学び続けられる仕組みづくりを支えていきたい。



放課後の「カフェマウンテン」

私の工夫

学科の枠を超えて「つなぐ・つながる」STEAM教育の取組

前　県立岡山工業高等学校　指導教諭
現　県教育庁高校教育課
指導主事（主幹）　山本　茂樹

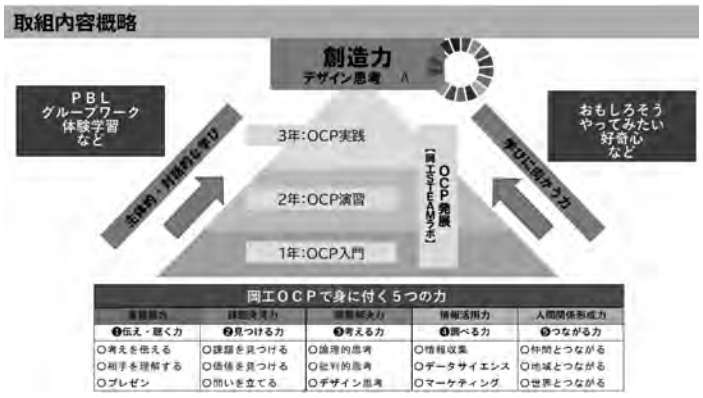


1　はじめに

県立岡山工業高校は1学年7学科8クラス、全校生徒約960名の、県下でも大規模な工業高校である。本稿では、本校の特色ある取組である【OCP（Okako Creative Project）】の中から、主に総合的な探究の時間で取り組んでいる「OCP演習」を中心にその概要と成果を紹介する。

2　OCPとは

本校では、平成31年から3年間、県指定の高等学校魅力化推進事業において、「STEAM教育による、社会の第一線で活躍できる専門的職業人の育成」をテーマに、Society5.0の時代に活躍できる人材の育成に取り組んだ。これは、1年生のOCP入門（LHR2時間）、2年生のOCP演習（総合的な探究の時間18時間程度）、3年生のOCP実践（課題研究）、そして学科・学年を超えた生徒の主体的な活動ができるOCP発展（課外特別活動）に至る、校内で体系化されたプログラムのことである。この取組は、事業終了後も継続している。



OCP概略図

3　OCP演習について

（1）活動の具体

1学期最初のプログラムは、「チームビルディング体験」である。「チームとはどんな集団なのか」を体験的に取り組んだ生徒は、その後の活動において自分の役割を的確に理解し、協働的・対話的に課題解決へ取り組む考え方を深めた。続いて、クラス単位で「岡工PR大賞」を実施した。これは、各専門学科のPR動画を生徒がチームで企画・作成し、それを相互評価し、評価の高かった動画を中学生対象のオープンスクールや学校説明会で上映するというプログラムである。次に、企業の方から新聞を用いた「調べる力」を身に付ける、体験的な講演を実施した。

2学期から3学期のプログラムは、【「未来に向けて「すごいこと」を創造しよう」～想像から創造へ～ミックスホームルームから生まれる新たな関係と価値】として、「ミックスホームルーム（7学科8クラスの生徒一人ずつ集まった8人1組の班×5班）」で実施した。ここが本取組における最大のポイントである。生徒は、普段はあまり話したことのない他学科の生徒と協働しながら、今の自分と未来のなりたい姿の自分とのギャップに気付き、未来と今をつ



毎回のレジュメと振り返りフォーム

なげるためにどんな力を身に付けたいのかを、強く意識しながら探究活動を実践していく。その過程で、ＯＣＰで身に付けさせたい５つの力（「伝え・聴く力」「見つける力」「考える力」「調べる力」「つながる力」）をはじめ、これからの社会で求められる新たな価値を創造する力が育成されると確信している。

（2）実践していく中で

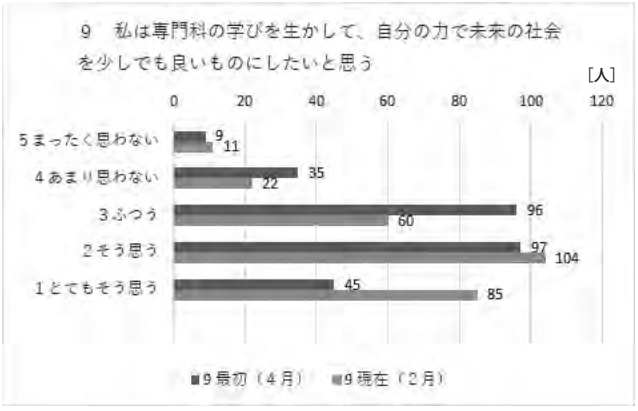
学科を超えた８名の生徒が、大きなテーマのもと自ら課題を見つけ、その課題解決案をポスターにまとめた。同級生をはじめ、１年生（オンライン視聴）、大学・教育関係者、ならびに企業の方々の前でポスターセッションを実施するというこの取組は、生徒にとっても私にとっても非常に挑戦的なプログラムであった。生徒は意欲の温度差による作業負担の偏りや、意思疎通の難しさといった課題を感じていた。こうした課題は、学年主任を中心に学年団で共有し、「教員も担任の枠を超えて各教室を回り、積極的に生徒と触れ合おう」と柔軟な解決案を考えていただき、実践した。生徒も教員も一体となって課題解決に取り組んだ甲斐もあり、生徒は回数を重ねるごとに、より積極的に取り組めるようになっていった。中でも、他学科の学びに深く共感したり、それらをもとに課題解決の糸口を探し出したりするなど、他者理解や、日常の授業でインプットされた教科の知識や技術に紐づいた課題解決案を出している班が見られたことが、このプログラムの本質的な価値の一つであると考える。ここで、生徒から生まれた実際の課題解決案を紹介する。「絶対に起きる目覚ましを作って寝坊ゼロを目指そう！」「二酸化炭素の排出量が可視化されるゲームを作る」など発想豊かなユニークなものもあった。ポスターセッションを終えた生徒の表情には、達成感と充実感があふれていた。



ポスターセッションの様子

（3）アンケートより

アンケートから、異なる学科の仲間と協働し、多様な考え方や強みを掛け合わせる「人間関係形成力」が身に付いたことがうかがえた。最初は心理的ハードルがあった他者との関わりの中で、適切な役割分担や調整力、主体的かつ自信を持った自己表現といった「伝える・聴く力」が磨かれ、目標に向け仲間と信頼関係を築く力が培われたことなどを読みとることができた。



アンケート結果

4　おわりに

２年次で経験した生徒が、北長瀬未来ふれあい総合公園の「憩い」をデザインする建築科の「ソコの輪プロジェクト」のメンバーとして活動したり、３年次におけるＯＣＰ実践での中心メンバーとして活躍したりと、段階的な連続した学びへとつながっていった。これらのことから、今回のプログラムは、ＯＣＰが目指す生徒の資質能力の育成において教育的な効果があったと考える。今後も、企業や地域連携・高大連携など様々な「つなぐ、つながる」をキーワードに、生徒は探究することの楽しさを実感し、「自分には、豊かな未来と今をつなげる創造力という価値」があるという自信と、確かな成長を感じられる教育活動を推進していきたい。

スポーツ分野で活躍する高校生

■令和８年度全国高等学校総合体育大会（近畿総体）　入賞者一覧

競技	種目・種別		学校名	氏名	学年	順位	備考
陸上競技	男子	100m	玉野光南	山田　夢叶	3	6位	
	男子	200m	玉野光南	山田　夢叶	3	3位	
	男子	800m	倉敷青陵	七村　颯大	3	7位	
	男子	5000m	倉敷	キプロブ　ケンボイ	3	4位	
	男子	400mH	岡山操山	福田　明人	3	2位	
	男子	砲丸投	岡山商大附	川﨑　裕太	2	2位	
	女子	七種競技	倉敷中央	小野　芽衣果	3	8位	
体操競技	男子	団体	関西			6位	
	男子	種目別あん馬	関西	村尾　映堅	3	3位	
	男子	種目別あん馬	関西	上近　琉斗	2	4位	
	男子	種目別あん馬	関西	今井　暖人	3	5位	
新体操	男子	団体	井原			1位	
	女子	種目別フープ	岡山南	小林　桃菜	3	6位	
水泳（競泳）	男子	100m平泳ぎ	矢掛	平井　良尚	1	8位	
	男子	200m平泳ぎ	矢掛	平井　良尚	1	2位	
水泳（飛込）	男子	飛板飛込	関西	伴　和真	3	5位	
	男子	学校対抗	関西			7位	
バスケットボール	男子	団体	岡山商大附			5位	ベスト8
バドミントン	女子	団体	倉敷中央			5位	ベスト8
	女子	シングルス	倉敷中央	渡邉　柚乃	2	1位	
ソフトボール	男子	団体	新見／高梁			3位	ベスト4
相撲	男子	100kg級	岡山理大附	後藤　優日	3	1位	
ウエイトリフティング	男子	65kg級スナッチ	笠岡工業	菊池　紫乃	3	5位	
	女子	69kg級スナッチ	倉敷商業	大嶋　珠々	1	8位	
	女子	69kg級クリーン&ジャーク	倉敷商業	大嶋　珠々	1	7位	
	女子	69kg級トータル	倉敷商業	大嶋　珠々	1	8位	
	女子	77kg級スナッチ	倉敷商業	大嶋　志歩	3	2位	
	女子	77kg級クリーン&ジャーク	倉敷商業	大嶋　志歩	3	2位	
	女子	77kg級トータル	倉敷商業	大嶋　志歩	3	2位	
登山	女子	団体	就実			8位	
柔道	女子	団体	創志学園			3位	
	女子	52kg級	創志学園	白金　里桜	3	2位	
	女子	78kg超級	創志学園	松本　明莉	3	2位	
テニス	男子	団体	関西			3位	ベスト4
	男子	シングルス	関西	稗田　光	3	2位	
レスリング	女子	57kg級	高松農業	佐藤　七菜香	2	5位	ベスト8
ローイング	女子	シングルスカル	岡山東商業	岡﨑　美空	3	4位	
自転車競技	男子	4Kmチームパシュート	水島工業			5位	
	男子	チームスプリント	岡山工業			2位	
	男子	ケイリン	水島工業	村瀬　琶音	3	3位	
	男子	1Kmタイムトライアル	岡山工業	松尾　泰成	3	1位	
	男子	3KmIP	岡山工業	小林　慶	2	5位	
	女子	スプリント	山陽学園	藤田　初風	3	3位	
	男子	学校対抗総合	岡山工業			3位	
	男子	学校対抗トラック	岡山工業			3位	
空手道	女子	団体組手	おかやま山陽			5位	ベスト8
	女子	個人形	倉敷	上野　愛紗	3	5位	ベスト8
	女子	学校対抗	おかやま山陽			7位	
なぎなた	女子	個人試合	美作	佐藤　さなみ	3	5位	ベスト8
少林寺拳法	女子	単独演武	倉敷天城	松本　安晟	2	8位	

■令和８年度全国高等学校定時制通信制体育大会　入賞者一覧

競技	種目・種別		学校名	氏名	学年	順位	備考
陸上競技	男子	800m	精華岡山	末石　恵大	3	5位	
	女子	100m	真備陵南	有村　晴捺	3	8位	

■令和８年度　その他の全国大会　入賞者一覧（高等学校）

競　技	種目・種別		学校名	氏　名	学年	順位	備　考
ボウリング	男子	団体戦	岡山理大附	前田　康誠、山本　太一	3/2	８位	
	男子	個人戦	岡山理大附	重森　啓吾	2	８位	
	男子	個人総合	倉敷	三好　祥志	2	８位	

スポーツ分野で活躍する中学生

■令和８年度全国中学校体育大会（中国ブロック）　入賞者一覧

競　技	種目・種別		学校名	氏　名	学年	順位	備　考
陸上競技	男子	1500m	さくら走練	中村　曹獅	3	１位	
	男子	走高跳	京山中	徳永　昂大	3	６位	
	女子	800m	京山中	中西　彩葉	3	２位	
	女子	4×100mR	京山中			４位	
水泳競技	男子	200m自由形	京山中	古賀　新之佑	3	８位	
	男子	1500m自由形	倉敷北中	森　慧斗	3	５位	
	男子	100m平泳ぎ	STY.SC	福田　陽琉	3	２位	
	男子	100m平泳ぎ	総社東中	廣瀬　咲人	3	６位	
	男子	200m平泳ぎ	STY.SC	福田　陽琉	3	１位	
	男子	200m平泳ぎ	総社東中	廣瀬　咲人	3	２位	
	女子	200m自由形	京山中	森　優	3	４位	
	女子	100mバタフライ	京山中	山室　璃奈	2	３位	
	女子	100mバタフライ	勝山中	芦田　みゆ	3	６位	
	女子	200mバタフライ	勝山中	芦田　みゆ	3	１位	
	女子	200mバタフライ	京山中	山室　璃奈	2	４位	
	女子	100m背泳ぎ	京山中	森　優	3	１位	
	女子	400mメドレーリレー	京山中			２位	
バスケットボール	男子	団体	倉敷南中			５位	ベスト8
サッカー		団体	岡山学芸館清秀中			５位	ベスト8
体操	男子	団体総合	関西クラブ			２位	
	男子	種目別床	関西クラブ	宮越　丞志郎	3	４位	
	男子	種目別床	関西クラブ	佐藤　陽向	3	６位	
ソフトテニス	女子	個人	山陽学園中	野田悠月、中川琴葉	3/3	５位	ベスト8
卓球	女子	団体	山陽学園中			３位	ベスト4
ソフトボール	男子	団体	新見第一中			１位	
柔道	男子	66kg級	市操山中	川畑　旬人	3	３位	ベスト4
	男子	81kg級	鏡野中	宰相 瑛太	3	５位	ベスト8
	女子	40kg級	芳井中	谷本　心	2	３位	ベスト4
	女子	57kg級	和柔道クラブ	中原　和禾	3	２位	
剣道	男子	個人	昇龍館一福道場	新山　瑛斗	3	５位	ベスト8

芸術文化分野で活躍する高校生

○令和８年度第50回全国高等学校総合文化祭（秋田大会）の成績

部　門	賞	学校名・学年・氏名
書道	奨励賞	県立倉敷商業高等学校・３年・山川　実緒
	特別賞	県立倉敷天城高等学校・３年・秋田　姫依
	特別賞	県立倉敷工業高等学校・３年・松永　菜花
写真	奨励賞	関西高等学校・３年・吉岡　直彦
放送	アナウンス部門　優秀賞 文部科学大臣賞	山陽学園高等学校・２年・津田　莉緒奈
	朗読部門　優秀賞	就実高等学校・３年・大福　美琴
	ビデオメッセージ部門　優秀賞	明誠学院高等学校
将棋	女子団体戦　第５位	県立倉敷南高等学校

人と科学の未来館サイピア プラネタリウム
「全国一斉大人のための熟睡プラ寝たリウム」

日頃のいそがしさを忘れ、満天の星の中で極上の癒やしを体験しませんか？
11月23日の勤労感謝の日、人と科学の未来館サイピアにて「熟睡プラ寝たリウム」を開催します。
前半は、秋から冬へと移り変わる美しい夜空の星々や冬の星座たちをゆったりと解説。後半は、鉄のスリットドラム「波紋音」の優しく水琴窟のような生演奏に包まれながら、うとうとと心地よい眠りの世界へ誘います。
頑張る自分へ、星空と音色が織りなす特別なリラックスタイムをプレゼントしませんか？（高校生以上対象、要予約）



【日時】11月23日（月・祝）
①13：30～14：30　②15：30～16：30　予約専用フォーム
【会場】サイピア２階サイエンスドーム
【料金】高校生以上1,000円（中学生以下入場不可）

★掲載している情報の他にもプラネタリウム解説員による生解説番組「ほしぞらタイム」や全天周映像番組もお楽しみいただけます。詳細はホームページをご確認ください。

【問い合わせ先】
岡山県生涯学習センター「人と科学の未来館サイピア」
岡山市北区伊島町３－１－１　TEL（086）251−9752
URL：https://www.sci-pia.pref.okayama.jp/
E-mail：info01@sci-pia.pref.okayama.jp

県立博物館

＜テーマ展「あこがれの京都（みやこ）～洛中洛外図を中心に～」＞

京都の市街（洛中）と郊外（洛外）を描いた洛中洛外図屏風は、貴重な情報の宝庫であり、歴史や美術史以外の様々な方面からも研究され続けてきました。当館には、洛中洛外をテーマとした６曲１双屏風が２件所蔵されています。１件はスタンダードな構図の屏風、もう１件は金雲で区切られた17の場面を華やかに描いた屏風です。
新たに見つかった個人蔵の貴重な屏風１件も合わせ、３つの大画面をじっくりご覧いただき、都のにぎわいや歴史の流れに思いを馳せていただければ幸いです。



チラシ
「あこがれの京都
～洛中洛外図を中心に～」

【主な展示資料】
①洛中洛外図屏風　　紙本著色　江戸時代中期　各170.0×378.0cm
②洛中洛外遊楽図屏風　紙本著色　江戸時代後期　各156.2×359.2cm

◆会 期 等　令和８年11月28日㈯～令和９年１月３日㈰
※休館日：月曜日、年末12月28日～31日
◆開館時間　９時30分～17時
◆入 館 料　大人260円、65歳以上130円、高校生以下無料
◆学芸員による展示解説
日　時：令和８年12月５日㈯、12日㈯　※時間はいずれも14時～15時
場　所：岡山県立博物館　２階展示室
その他：事前申込不要、見学無料（入館料は必要）

【問合せ先】岡山県立博物館　岡山市北区後楽園1-5　TEL（086）272-1149（代表）
【HP】県立博物館　URL:http://www.pref.okayama.jp/site/kenhaku/
ホームページへアクセスできます。

★掲載している情報は変更される可能性もありますので、詳細はご確認ください。

「学び」を地域で仕掛けてみたら、豊かな地域になるかもしれない

社会教育主事 社会教育士

今年度も、社会教育主事講習を岡山県生涯学習センターで実施します

社会教育主事・社会教育士って何をする人？

コミュニティの希薄化、子育てや介護が生む孤立、居場所や出番のない子ども・若者、災害から命を守る防災の備え、国籍の違いや障害の有無などによる分断などなど、私たちのまちや暮らしには課題がたくさんあります。

地域全体で地域の課題を解決し続けていく中で 「地域を面白くしたい」「新たな人ともっと出会いたい」「多様な人ともっとつながりながら活動したい」 という前向きな気持ちになれるきっかけづくりをする人。

受講資格は？

次のいずれかに該当する方
- 大学・短大等を卒業
- 教員免許を所有
- 社会教育関係の職に２年以上従事
- 学校に４年以上勤務　等

こんな方たちにおすすめ

- 学校の教職員（地域の人と連携したい）
- 地域の人たち（子どもたちを地域ぐるみで育てたい）
- 行政職員（地域のニーズに寄り添いたい）
- 社会教育施設職員（公民館、青少年教育センターなどではたらく人）
- 企業（地域に根ざした活動をしたい）
- ＮＰＯ職員

いつ、どんな科目を受講するの？

受講科目	実施方法	期　間
生涯学習概論	ｅラーニング，ライブ配信	１月１２日（火）～１月２２日（金）
社会教育経営論	ｅラーニング，ライブ配信	１月２３日（土）～２月　２日（火）
生涯学習支援論	ライブ配信・集合形式	２月　３日（水）～２月　９日（火）
社会教育演習	集合形式	２月１０日（水）～２月１７日（水）

集合形式で実施する会場は、岡山県生涯学習センターです。

申込み方法　募集要項が届き次第、岡山県生涯学習センターホームページにてお知らせします。

費　　用　12,000円程度　※テキスト代等

そ の 他　インターネットを活用した受講が可能な設備があること。（パソコン、ネットワーク環境等）全日程・全講義にすべて出席できること。

そのあとはどうなる？

社会教育主事講習　修了 ―――→ 「社会教育士」として地域で活躍

―――→（自治体から発令）「社会教育主事」として社会教育行政を推進

岡山県教育庁生涯学習課　TEL　086−226−7597　e-mail　syogai@pref.okayama.lg.jp
岡山県生涯学習センター振興課　TEL　086−251−9751　e-mail　syogaise05@pref.okayama.jp



「近視への理解促進に係るポスター」（文部科学省）抜粋

保護司の活動をご存じですか？

保護司は、犯罪をした人や非行のある少年の立ち直りを地域で支えるボランティアで、身分は、非常勤の国家公務員です。保護司になると、保護観察を受けている人と面接をして指導や助言をしたり、刑務所や少年院に入っている人の帰る先の生活環境の調整をしたり、概ね市区町村を単位とする保護司会組織の一員として地域の方々に立ち直り支援への理解と協力を求める地域活動などを行います。現在、岡山県内で約９００人の保護司が活動され、うち、約１割の方が、岡山県内で教職員をされ、御退職後に保護司に委嘱された方々です。

詳しくは以下の連絡先にお問合せください。（『教育時報』を見ました。」とお伝えください。）

（連絡先）
〒700-0807 岡山市北区南方 1-8-1
TEL086-224-5661
岡山保護観察所　企画調整課

保護司パンフレット

更生保護パンフレット



更生保護マスコットキャラクター
更生ペンギンのホゴちゃん、サラちゃん

創作の広場

「かぷかぷ笑ったよ」



県立玉島高等学校３年
冨田（とみた）　のどか
大島（おおしま）　早葵（さき）

短評

本作は宮沢賢治の『やまなし』を基に、「命の循環」を表現した作品です。地元の玉島地域の工場から出た廃材を活用し、半年かけて制作しました。大きな蟹を取り囲むように小魚や小さな蟹、魚の骨が大きな渦を巻くように構成されており、力強い命のうねりを表現しています。本作品は、全国高等学校総合文化祭に岡山県代表として出品されました。

（美術部顧問　妹尾　佑介）

第四十二回　成田山全国競書大会
内閣総理大臣賞　受賞
「条幅」

倉敷市立茶屋町小学校
４年　池田（いけだ）　瑠花（るか）



短評

池田さんは、勉強熱心で友達思いな優しい人です。そんな池田さんは、毎日習字とひたむきに向き合い、努力を重ねた結果、これまで数々の素晴らしい賞を受賞してきました。その真摯な姿勢と成果は、担任として誇らしく思います。これからも文武両道を目指し、自分らしく輝き続けてくれることを期待しています。

（担任　須磨　涼介）

令和８年度
インクルーシブ教育×ICT活用推進フォーラムを開催します！

発達障害等のある幼児児童生徒が、適切な指導・支援を受けられる多様な学びの場の体制整備、教職員の指導力向上及び一貫した支援体制について、「ＩＣＴ活用の視点」から様々な実践モデルを示し、インクルーシブ教育システム構築の理念について理解啓発を図るためにインクルーシブ教育×ＩＣＴ活用推進フォーラムを開催します。

本フォーラム前半では、幼稚園等、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校などにおける特別支援教育の充実を目指した取組について発表を行います。

後半には、おかやまインクルーシブな学校運営モデル事業の成果報告とシンポジウム、岡山大学の吉利宗久先生による指導講評を予定しています。

本フォーラムをきっかけに、発達障害等のある幼児児童生徒が主体的に学ぶことができるための一貫した支援やＩＣＴを活用した指導・支援が一層充実し、共生社会の実現に向けた特別支援教育が推進されることを期待しています。

日　　時　令和８年12月25日（金）13:00～16:00

開催方法　ハイフレックス型
- 会　　場：ピュアリティまきび
  岡山市北区下石井２丁目６－41
- オンライン：Microsoft Teams 会議

対　　象　岡山県の教育、医療、福祉機関の関係者等

定　　員　会　　場：１５０名
オンライン：２００名（予定）

問い合わせ先　岡山県教育庁特別支援教育課
ＴＥＬ：０８６－２２６－７９１２

申し込み先





令和７年度のフォーラムの様子

令和八年十一月発行　第七十八巻七号　通巻九百二十二号
編集発行　岡山県教育委員会　岡山市北区内山下　☎０８６－２２６－７５６９
印刷　株式会社　セイキ
ISSN 1345-3750

環境にやさしい植物油インキを使用しています。
VEGETABLE OIL INK